

日本のエホバの証人 定量的研究

エホバの証人の見方, 家族生活, 幸福に関する調査

研究責任者

シャオジュン・フー
(Xiaojun Hu, Ph.D)

共同研究者

村田忠彦
(Tadahiko Murata, Ph.D)

推奨引用形式

シャオジュン・フー, 村田忠彦
「日本のエホバの証人 定量的研究」

2024年(完成版は後日公開) www.jwj-qs.jp

この科学的研究は、エホバの証人の日本支部と世界本部の協力を得て、研究者によって独自に実施された。国際的な研究者で構成される学術諮問委員会が調査デザインを検討し、データの妥当性を検証し、この報告書を承認した。

学術諮問委員会

アイリーン・バーカー
(Eileen Barker, Ph.D)

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス,
宗教社会学名誉教授

木幡洋子
(Yoko Kowata, Ph.D)

愛知県立大学教育福祉学部名誉教授

ジェームズ・T・リチャードソン
(James T. Richardson, Ph.D, JD)

ネバダ大学リノ校社会学・司法学名誉教授

スチュアート・A・ライト
(Stuart A. Wright, Ph.D)

ラマー大学社会学部教授

プロジェクト・コンサルタント: ジョリーン・チュー (Jolene Chu, MA), 上級研究員, エホバの証人

学術諮問委員会による 研究方法のレビュー

日本のエホバの証人（JW）団体には、全国に2800以上の会衆（各地域にある信者のグループ）があり、20万人以上の信者がいる。最近、信者のライフスタイル、信条、行動について多くの情報を得る必要が生じた。政府関係者や政策立案者に情報を提供し、このグループとその価値観や活動に関する日本での非常に否定的なマスコミ報道を検証するためである。そのような報道により、日本政府はJWの活動の一部を制限する、あるいは宗教団体としての地位を完全に剥奪するようという提案を検討するようになった。それゆえ、この問題について証拠に基づく情報をごく短期間で集める必要があり、クリエイティブで集中的な努力が求められた。開発された複雑な調査デザインは、他の場所で宗教団体に関する調査を展開する方法のモデルとして役立つだろう。採用されたアプローチの方法を、手順と全体的な努力に対する評価とともに簡単に説明する。

統計学者と情報科学の研究者である2人が、それぞれ研究責任者と共同研究者としてプロジェクトを監修した。調査デザインと分析計画は、経験豊富な研究者から成る学術諮問委員会によって検討された。この宗教団体は、調査結果の作成に関与せず、研究者が調査対象者にアクセスすることを認めた。こうして、日本全国のJW信者の無作為サンプルに近いサンプル集団を対象にしたオンライン調査を実施することが可能になった。

宗教団体の信者を対象に全国的な調査を行うのは非常に難しく、かなりの費用がかかる可能性がある。ここ数十年の間に、インターネットによってこうした作業はより行いやすくなっている。もちろん、これは宗教団体がそのような目的のために開発されたインターネットベースの調査ツールを使って信者とやり取りできることが前提となる。しかし、たとえ宗教団体がインターネットを通じて信者とやり取りできるとしても、多くの課題がある。宗教団体の全信者にインターネット調査への回答を求めるなら、膨大な量のデータを分析しなければならなくなり、これは現実的ではない。したがって、信者を十分に代表しているといえるサイズのサンプルを集めて、関心のある重要な変数（年齢、性別、団体での活動期間、育児方法など）に関するデータから結論を導き出すには、無作為抽出法を採用する必要がある。

またサンプルは、重要なさまざまな変数に関する分析を可能にするのに十分なサイズでなければならぬ。最初のステップは、日本の47都道府県から少なくとも1つの会衆を含む、150の会衆を無作為に選ぶことだった。これは、諮問委員会のメンバーである経験豊富な研究者（JWではない）によって行われた。その後、日本のJWの事務所から提供されたメールアドレスを使って、150の各会衆の連絡担当者（会衆の世話役を務める長老）にメールを送り、研究プロジェクトについて説明し、一定の参加

資格を満たした全信者に調査アンケートへのリンクを送るよう依頼した。対象者にはアンケートへのリンクが送られた。このアンケートは、必要な分野の情報を得られるように開発されたもので、回答の機密性を確保するため、匿名でオンラインで記入された。

参加資格は、18歳以上であること、現在日本語会衆の集会に参加しているバプテスマ（浸礼）を受けた信者であること、過去6カ月間伝道に参加していたことなどである。1万1000人以上の信者に参加を呼び掛け、8000人以上がアンケートのリンクを希望し、受け取った。アンケートフォームが適切に機能することを確認するためにいくつかのテストを行った後、調査は2024年1月に2つのグループに分けて実施された。調査の結果、合計7640件の回答が得られた。合計447の回答が削除され、残りの7193の回答が分析に使用された。参加資格を満たさなかった回答者（160人）はサンプルから除外され、社会的望ましさのバイアス（社会的望ましさを測る5つの質問*全てに同じ極端な回答で答える）がかかった回答をした239人の回答者もサンプルから除外された。また、「自分の誕生日より前の年にバプテスマを受けた」というあり得ない報告をした45人の回答者と、少なくとも2つの連続する質問のセットについて同じ回答を選択する「連続同一回答（ストレートライニング）」に該当した3人もサンプルから除外した。

全体的な調査デザインと計画は、さまざまな国で少数派宗教の研究に何十年も携わってきた経験豊かな学者から成る諮問委員会によって検討された。諮問委員会の学者たちはJWではない。このように、調査はJWの調査員によって実施されたが、独立した諮問委員会の存在は、この調査に信頼性を与えている。また、注目に値する別の点として、調査デザイ

ンの他の要素（会衆の無作為抽出、匿名での回答、社会的望ましさの尺度のような検証された方法の使用、データ収集と分析の透明性、さらに調査デザインの限界に関する包括的な声明）が、このプロジェクト全般の妥当性を高めている。

上記のアプローチによって、JWの生活の多くの側面を分析することを可能にする大規模なデータセットが得られ、マルチレベルの手法の有効性が示された。この点で独立した研究者から成る諮問委員会が果たした役割は非常に大きい。アンケートは長く、50セットの主な質問が、JWの生活の4つの分野（宗教的要素、家族生活、一般的な見方、健康と幸福）に分類されている。これらのデータは、日本で広まっているJWに対する批判に応える上で有用である。また、この調査のために開発された方法は、他の宗教団体や宗教学者が、特定の宗教団体の信者の生活の詳細を調べる際のモデルとなると考える。

JWJ-QS 学術諮問委員会

アイリーン・バーカー, Ph.D

木幡洋子, Ph.D

ジェームズ・T・リチャードソン, Ph.D, JD

スチュアート・A・ライト, Ph.D

* ロン・D・ヘイズ, トシ・ハヤシ, アニータ・L・スチュワート, 「社会的に望ましい反応の5項目測定法」, 『教育・心理測定』(“A five-item Measure of Socially Desirable Response Set,” *Educational and Psychological Measurement*) 49, no.3 (Autumn 1989) : 629–636, <https://doi.org/10.1177/001316448904900315>

目次

セクション1: 日本のエホバの証人の系統的研究

セクション2: 宗教に関する見方や経験

セクション3: 家族生活*

セクション4: 全般的な見方*

セクション5: 健康と幸福*

*順次公開予定

セクション1

日本のエホバの証人の系統的研究

はじめに

「日本のエホバの証人 定量的研究 (JWJ-QS)」は、日本のエホバの証人の見方、価値観、行動を調査するものである。2023年時点で、このキリスト教のグループには日本に約21万4000人の信者がおり、これは日本の総人口（1億2475万2000人）に対して583人に1人の比率になる。世界全体では約900万人のエホバの証人が239の国や地域で信仰を実践している。¹

エホバの証人 (JW) は、自分たちの信条を人々に伝えることで知られる宗教団体であり、19世紀後半に米国で活動を始めた当時は聖書研究者という名称であった。1920年代に初めて日本に上陸したが、1940年代後半になるまでは、そのメッセージに答え応じる人は日本にほとんどいなかった。だが戦後になって、エホバの証人の信仰を受け入れる日本人が増えていった。² 1977年に日本で行われたエホバの証人の定量的社会学研究では、日本が劇的な社会変動と世俗化を経験したため、エホバの証人の信仰の非物質主義的な見方、家族生活や子育てに関する助言、コミュニティの結束力が、人々を引きつける要因になったと結論付けている。³ 日本のエホバの証人に対し、同様の定量的研究はこれまで数十年間行われてこなかった。

エホバの証人に関する科学的データの欠如は、少数派宗教を巡る最近の2世問題との関連で大きな注目を集めている。2022年7月、安倍晋三元首相が統一教会信者の成人した息子に殺害された事件を受けて、少数派宗教に対する扇動的な言説が展開されている。⁴ 元エホバの証人や、エホバの証人の親に育てられた2世の活動家たちの一部がこの運動に参加し、JWの子育て、親権、医療選択に関連する申し立てに基づき、JWの宗教活動を制限するよう政府に呼び掛けている。

一般の論議や学術文献から抜け落ちているのは、第1世代、第2世代を含め、現在エホバの証人のコミュニティを形成している信者の視点である。そのため、宗教の科学的研究に関心を持つ独立した研究者チームが、日本の全都道府県から抽出したエホバの証人について、方法論的に厳密な調査を実施した。調査アンケートは、エホバの証人の日本支部および世界本部の協力を得て作成した。専門分野の異なる国際的な研究者たちで成る学術諮問委員会が、研究方法、調査デザイン、データ分析を検討した。(委員会のメンバーはJWではない)。学術諮問委員会の提案は本報告書に反映されている。

¹「2023奉仕年度の報告 エホバの証人の世界的な活動：2023年 国や地域からの報告」

<https://www.jw.org/ja/ライブラリー/本/2023奉仕年度の報告-エホバの証人の世界的な活動/2023年-国や地域からの報告/>

²「1998エホバの証人の年鑑：日本」(ニューヨーク法人ものみの塔聖書冊子協会, 1998年, ブルックリン, NY) 66-161。

³ブライアン・R・ウィルソン, 「日本における『エホバの証人』の発展と親族関係の諸問題」, 『社会的羅針盤 (仮訳)』 (“Aspects of Kinship and the Rise of Jehovah's Witnesses in Japan,” *Social Compass*) 24, no.1 (1977) : 97-120。

⁴リーバイ・マクラフリン, 「安倍元首相銃撃事件と日本における宗教と政治の結び付き (仮訳)」, 『現代史 (仮訳)』 (“The Abe Assassination and Japan's Nexus of Religion and Politics,” *Current History*) 122, no. 845 (2023) : 209-216。

調査目的

JWJ-QSの主な調査目的は以下の4つである。

1. 日本のエホバの証人の人口統計学的特徴と宗教的動機の特定
2. 日本でエホバの証人になった人たちの家庭生活（家族の全般的な満足度と機能，結婚関係，子どものしつけ，性と宗教についての話し合い）の調査
3. エホバの証人のコミュニティーに属する人たちの見方や価値観（優先順位，気に掛けていること，社会的責任）の調査
4. 日本のエホバの証人の健康と幸福度の調査

調査デザイン

アンケートには50ほどの主な質問セットがあり，調査目的に対応した4つのセクションに分けられている。表1.1は，各セクションのテーマとそれに関連する項目を示している。宗教的要素に関するセクションでは，どんな人がエホバの証人になっているか，その宗教のどこに魅力を感じたのか，その宗教が自分の生活にどんな影響を与えていると感じているか，などを調べた。家庭生活に関するセクションでは，家族に対する満足度，結婚関係，子育てに関する見方とその実践について調べた。

表 1.1. 調査テーマ

宗教的要素	家庭生活	全般的な見方	健康と幸福
誰がJWJになったか	満足度	価値観，優先順位	健康習慣
この宗教の魅力	結婚関係	気掛かりな事	医療
感じている変化	子育て	社会的責任	幸福感

アンケートの最後には，参加者が調査項目に関連したコメントを自由に記述することもできた。本報告書では，今回の定量的分析から得られた結果を反映するコメントを抜粋して掲載している。また，一部の数値は四捨五入し，合計100%となるようにしている。

方法

本研究では，匿名のオンライン調査を実施し，バプテスマを受けた日本のエホバの証人の成人信者のサンプル集団からデータを収集した。エホバの証人のコミュニティーでは，信者の名前や連絡先情報を一括して管理していないため，個人を無作為にサンプル抽出するのは不可能であった。従って本研究では，信者を十分に代表するサンプルに近似させることを目的として，会衆単位の無作為クラスター抽出法を採用した。調査デザインには，以下のような方法論的側面が含まれている。

無作為クラスター抽出法。研究責任者（PI）と共同研究者（Co-PI）は，日本の地理に詳しい学術諮問委員会のメンバーに，2807の日本語会衆から無作為に150の会衆を選ぶよう依頼した。47都道府県からそれぞれ1～8会衆が選ばれた。PIはエホバの証人の支部事務所から，無作為に抽出された会衆の連絡担当者（会衆の世話役を務める長老）のメールアドレスを入手し，その連絡担当者に調査への招待とアンケートへのリンクをメールで送った。連絡担当者は会衆内の資格を満たす信者全員に，メールまたはテキストメッセージで調査への招待を送った。

参加資格。調査に参加できたのは，18歳以上のバプテスマを受けたエホバの証人で，現在日本国内の日本語会衆の集会に出席しており，過去6カ月間，宣教活動に参加していた人である。調査期間終了後，調査に参加した会衆の連絡担当者は，資格を満たして調査への招待を受け取った信者の人数

(合計1万1344人)と、そのうち実際にアンケートのリンクを希望し受け取った人数(合計8197人)を、PIにメールで報告した。

サポートの提供。できるだけ信者全体を代表するサンプルとなるよう、また参加資格があるもののアンケートの回答にサポートを必要とする人も除外しないようにするため、必要であれば、回答者がアンケートを読んだり電子機器を使用したりする際のサポートを受けられるように配慮した。7193人の回答者の大半(86.4%)は、サポートを必要としなかったと回答した。(サンプルサイズの詳細は次ページを参照)。残りの8.1%は電子機器の使用面でのサポート、3.2%は質問を読む面でのサポート、2.3%はその両方のサポートを受けたと回答した。

調査の実施期間。本調査を開始する前に、まず1日のソフトローンチ期間を設け、調査アンケートリンクとプラットフォームが正常に機能することを確認した。調査は2024年1月5日から14日にかけて、5日間ずつ2つのグループに分けて実施された。オンライン調査プラットフォーム KoboToolbox⁵では、抽出された150の会衆に複数のリンクを同時に送ることができるため、データ管理が改善され、2つのアンケート期間中に回答の収集が中断することはなかった。調査プラットフォームはアンケートの開始時間と終了時間を自動的に記録したが、回答に要した平均時間は102分だった。

データ処理

アンケート終了後、データはKoboToolbox調査プラットフォームサーバーからMicrosoft Excel文書にエクスポートされた。統計分析用の定量的データセットを匿名化し、個人を特定できないようにした。同意書の説明にある通り、今後の調査に協力できる回答者は自分の連絡先を入力したが、そのデー

タは内密に保たれ、定量的統計分析に使用されるデータセットとは別に保管された。

回答率。第1グループの75会衆では3828人から、第2グループの75会衆では3812人から回答の提出があった。10日間にわたるアンケート調査期間中、招待された1万1344人の信者のうち、合計7640人から回答が寄せられ、回答率は67.3%だった。

データクリーニング。データの信頼性を確保するため、統計分析のサンプルに適格な回答者のみが残るように、データクリーニングが行われた。

160人の回答者は調査リンクを開いたものの、資格基準に関する5つの質問への回答から不適格と判断された。調査プラットフォームは、5つの資格基準全てを満たしていない回答者については、自動的にオンラインアンケートへのアクセスを拒否する仕様になっていた。アンケートに参加する資格がなかった回答者の内訳は、「現在日本語会衆の集會に出席していない」が107人、「18歳未満の未成年者である」が39人、「過去6カ月間伝道に参加していない」が10人、「アンケート調査に同意しない」が8人、「バプテスマを受けたエホバの証人ではない」が1人であった(5人は2つの資格基準で不適格)。

質の高いデータを得るため、本音や実際の経験ではなく、明らかに社会から好意的に見られることを意図して答える回答者を特定するために質問を工夫した。⁶ 評価を5段階から選択する質問に対してあまりにも好意的な回答ばかりであった239人が除外された。

次に、データクリーニングにより、信頼性に欠けると判定された48人の回答者(例えば、自分の誕生日より前の年にバプテスマを受けたというあり得な

⁵KoboToolboxは、データセキュリティ対策、パスワードで保護されたアクセス制限、データの暗号化、ウイルスや侵入者に対するファイアウォール保護、スキップロジック機能により、欧州連合の一般データ保護に完全に準拠した機密データ収集を可能にした。同じユーザーが同じデバイスで複数回アンケートに回答することを防ぐため、回答者1人につき1回のみ送信できる機能が選択された。(https://www.kobotoolbox.org)

⁶ロン・D・ヘイズ、トシ・ハヤシ、アニータ・L・スチュワート、「社会的に望ましい反応の5項目測定法」、『教育・心理測定』(“A five-Item Measure of Socially Desirable Response Set,” *Educational and Psychological Measurement*) 49, no.3 (Autumn 1989) : 629–636, https://doi.org/10.1177/001316448904900315

い報告をした回答者) が除外された。その中には、少なくとも2つの連続する質問のセットについて同じ回答を選択したため、アンケートを注意深く読んでいないと判断された3人も含まれる。合計で、447人の回答がデータセットから除外された。

サンプル

データクリーニング後のサンプル総数は7193人となった。本セクションではエホバの証人の調査対象者の特徴について説明する。日本の一般人口データが入手可能な項目については、調査サンプルの人口統計学的特徴を一般人口の分布と比較して示した。ただし、国の調査と本調査では測定尺度が異なるため、直接的な比較はできなかった。

性別と年齢分布。表1.2は、サンプル集団の性別および年齢層別の割合を、18歳以上の一般人口と比較したものである。日本のエホバの証人は、初期から男女の数に明確な差異が見られてきたが、エホバの証人の女性の比率(71.0%)は一般人口(51.8%)より高い。⁷日本でも世界でも、宗教心は男性より女性の方が強く⁸、若者より年長者の方が強い傾向にある。⁹同様に、エホバの証人のサンプル集団でも60歳以上の高齢成人が48.6%、40歳から59歳の中年成人が36.9%、18歳から39歳の若年成人が14.5%だった。

表 1.2. 日本の人口と JW サンプル (性別・年齢層別)

	合計	男性	女性	若年成人 (18~39歳)	中年成人 (18~39歳)	高齢成人 (60歳以上)
2022年日本の人口 (18歳以上)	107,209 (単位:千人)	48.2%	51.8%	26.7%	32.6%	40.7%
JW サンプル	7,193	29.0%	71.0%	14.5%	36.9%	48.6%

出典：e-Stat、統計で見る日本（人口推計／各年10月1日現在人口 [年齢（各歳）、男女別人口及び人口性比—総人口、日本人人口、2022年10月1日]、アクセス・計算：研究責任者、2024年1月25日）。表1. 年齢（各歳）、男女別人口及び人口性比—総人口、日本人人口、2022年10月1日。

https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200524&tstat=000000090001&cycle=7&year=20220&month=0&tclass1=000001011679&stat_infid=000040045487&result_back=1&tclass2val=0

注：「人口推計／各年」のExcel報告書は、上記のe-Stat!リンクからアクセスできる。JWサンプルとの比較分析を可能にするため、日本の総人口は18歳以上のみを含むように調整した。18歳未満は除外され、全サンプル数、性別、および年齢分布の割合を計算した。

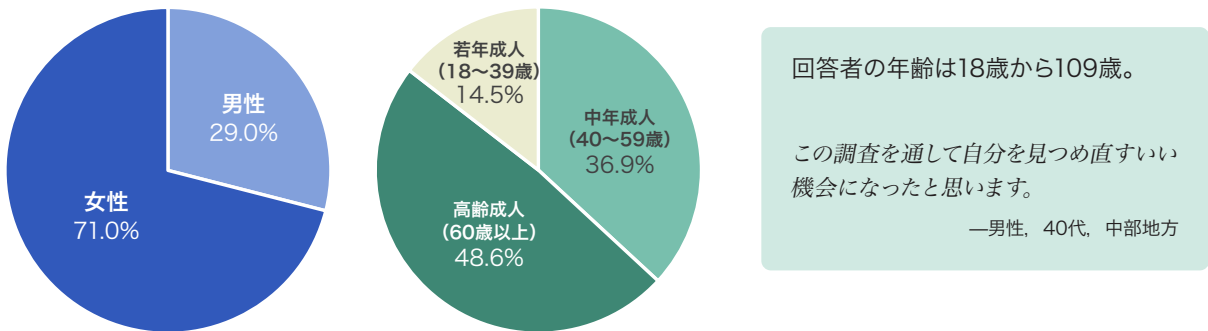
⁷ウィルソン、107-108ページ。

⁸ピュー研究所、「世界の宗教における男女格差（仮訳）」（“The Gender Gap in Religion Around the World”）、2016年3月22日、<https://www.pewresearch.org/religion/2016/03/22/the-gender-gap-in-religion-around-the-world/>

⁹ピュー研究所、「世界の宗教における年齢格差（仮訳）」（“The Age Gap in Religion Around the World”）、2018年6月13日、<https://www.pewresearch.org/religion/2018/06/13/the-age-gap-in-religion-around-the-world/>

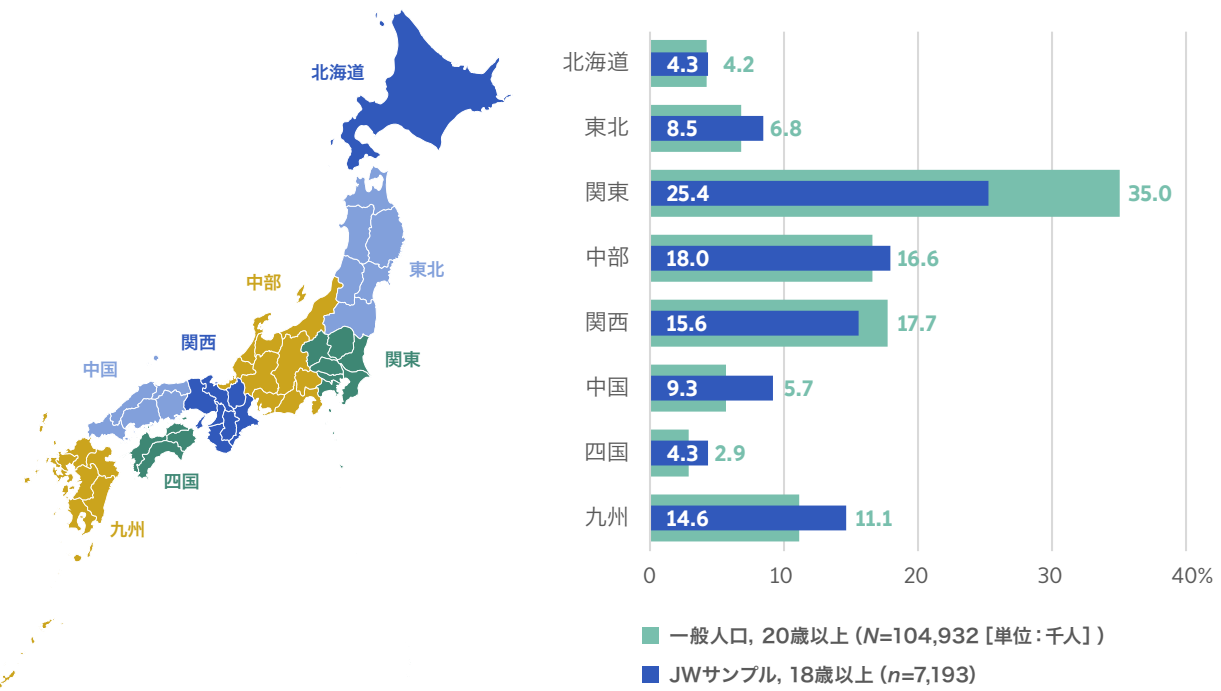
図1.1のグラフはエホバの証人のサンプル集団の性別と年齢分布を示している。

図 1.1. 性別と年齢別のサンプル分布



地域およびエリアの分布。無作為クラスター抽出には全都道府県の会衆が含まれた。図1.2は、日本の8つの地域別に、サンプル人口と一般成人人口の割合を比較したものである。サンプルでは中国地方と九州の割合がやや高く、関東の割合が低かった。一般人口とサンプル人口の差異は、調査に招待された会衆の数の違いによるものである。回答者の居住エリアは、海側が27.6% (1987人)、内陸が57.2% (4111人)、山側が15.2% (1095人) だった。

図 1.2. 日本の人口とJWサンプルの地域別割合



出典: e-Stat, 統計で見る日本, 「人口推計/年次」, (都道府県, 年齢[5歳階級], 男女別人口-総人口, 日本人人口[2022年10月1日現在], アクセス: 計算: 研究責任者, 2024年1月25日)。年齢(各歳), 男女別人口及び人口性比-総人口, 日本人人口, 2022年10月1日。

注: 一般人口のデータは20歳以上を、サンプル人口は18歳以上を対象としている。18歳以上のJWサンプルとの直接比較はできなかったが、これは一般人口が5歳階級の年齢層でまとめられているためである。20歳以上の各地域の人口比率は、まずそれぞれの地域に含まれる都道府県の人口を合計し、次に20歳以上の総人口に対する割合を計算した。

教育。表1.3は、18歳以上のサンプル集団のデータと、入手できた15歳以上の一般集団のデータの教育レベルを比較したもの。JWの回答者の約95.2%が義務教育（小学校6年間と中学校3年間）後も学校教育を継続している。JWサンプルのうち、58.4%

が高校を卒業しており、3分の1以上（36.7%）が中等教育より後の学校を卒業している。JWの回答者のうち、「正式な教育は受けていない」と回答したのは2人で、52人（0.7%）は無回答だった。

表 1.3. 教育レベル, 日本の人口とJWのサンプル集団

教育レベル	日本の人口, 15歳以上 (N=108,259, 単位:千人)	JWサンプル, 18歳以上 (n=7,193)
小学校・中学校	11.2%	4.1%
高校・旧中	35.0	58.4
短大・高専	12.8	24.4
大学・大学院	20.2	12.3

出典：総務省統計局、「第73回 日本統計年鑑」, (東京：総務省統計局, 2024), 63ページ, 表2-9, 年齢階級, 教育程度別15歳以上人口 (平成12年~令和2年), <https://www.stat.go.jp/english/data/nenkan/73nenkan/zenbun/en73/book/index.html#page=96>.

注：表は主な教育レベルを含む。合計して100%にはならない。小数点第2位以下は四捨五入。

職業。JWサンプルは、厚生労働省の職業分類の全ての職種に分布していることが分かる。表1.4に示すように、過半数（50.6%）がサービス業、事務職、販売業、運送業に従事している。また16.2%が管理的職業、専門職、技術職に就いている。

表 1.4. 職業，日本の人口，JWサンプル人口

職業別就業者	日本の就業人口 (N=67,230 [単位:千人])	就業中のJWサンプル (n=4,153)
管理的職業	1.8%	2.2%
専門的・技術的職業	19.0	14.0
事務的職業	20.8	10.6
販売・営業の職業	12.3	8.9
サービスの職業	12.2	27.2
警備・保安の職業	1.9	0.5
農業・林業・漁業の職業	3.0	1.7
製造関連の職業	12.9	6.0
運送・機械運転の職業	3.2	3.9
建設業・鉱業の職業	4.1	7.0
運搬・清掃・包装等の職業	7.3	8.9

出典：総務省統計局，「日本統計ハンドブック2023」，（東京：総務省統計局，2023），130ページ，表12.3：職業別雇用。
<https://www.stat.go.jp/english/data/handbook/pdf/2023all.pdf#page=145>.

注：この表にはサンプル人口に対応する主な職業が含まれている。合計して100%にはならない。小数点第2位以下は四捨五入。

全体の中で、「その他」を選択した4.8% (n=343) と、無回答を選択した0.6% (n=41) は上の表に含まれていない。JWアンケートでは職業以外の選択肢も用意されており、全サンプルに対するその比率は、専業主婦 (29.2%)，学生 (0.3%)，介護・出産・育児休業 (0.1%)，無職 (10.2%)，退職 (1.3%)，障害者 (1.1%) だった。女性回答者のうち，41.0%が専業主婦と回答している。

就業と経済的特徴。JWサンプル人口の就業率は57.7% (就業者4153÷サンプル総数7193) で、2022年の国の調査における日本の就業率は60.9%だった。¹⁰ 退職年齢である65歳以上のJWサンプルの就業率は27.4% (758÷2771) で、一般人口においては25.2%である。¹¹ JWサンプル人口の無職者の割合は、18歳以上64歳未満で4.3% (151÷3546)、18歳以上では15.1% (736÷4889) であった。¹² 無職者と回答した人のうち、79.5% (585人) が65歳以上だった。全国の失業率は2.6%である。¹³ 一般人口とJWサンプルに見られる差は、年齢分布の差によるものと考えられるだろう。

JW調査では、回答者は経済的状況を自己評価して、家計支出に関する5つのカテゴリの中から選択した。結果は次の通りである。JWサンプル全体の7.8%が、「かなり高価なもの(家や車など)も買う余裕がある」、46.0%が「家電製品も無理なく買うことができる」、30.3%が「食べ物や服を買うためのお金は十分あるが、大きな買い物(テレビ、冷蔵庫など)をするのは難しい」と回答した。また8.6%が「食べ物のためのお金は十分あるが、服を買うのは難しい」、2.4%が「ぎりぎりでは何とかやっている。食べ物のお金すら十分でない」と答えた。(4.9%は無回答だった。) この5段階評価の下位2つのカテゴリである「服を買うのは難しい」および「食べ物のためのお金すら十分でない」と回答したJWサンプルの合計は、11% (787人) だった。測定方法が異なるため一般人口との直接比較はできな

いが、2021年の全国の相対的貧困率は15.4%であった。¹⁴

この経済的弱者のサブグループと大まかに比較するために、厚生労働省の報告書にある相対的貧困率と自己評価という2つの経済指標が用いられた。厚生労働省の調査では、回答者は自身の経済状況を「大変ゆとりがある」、「ややゆとりがある」、「普通」、「やや苦しい」、「大変苦しい」のいずれかで評価した。¹⁵

厚生労働省の全国調査で貧困率が高かった2つのグループは、子どもがいる世帯のうち大人(18歳以上65歳未満)が1人の世帯(44.5%)と、65歳以上の単身女性(44.1%)だった。¹⁶ 厚生労働省の調査とJWの調査で使用した指標は同じではないが、どちらも経済状況を評価する主観的指標として使用できる。同じ人口統計学的サブグループを比較してみると、18~64歳のエホバの証人1人と未成年の子どもがいる世帯のうち、経済的に苦しいと答えた人の割合は16.0% (8÷50)、65歳以上のJW単身女性では19.6% (72÷367) だった。

厚生労働省の経済状況自己評価で、経済的困難の度合いが高い(「やや苦しい」と「非常に苦しい」の合計)と回答したのは、未成年の子どもがいる世帯で54.7%、母子世帯で75.2%だった。¹⁷ JWサンプルの同様のサブグループでは、経済的困難の度合いが高いと回答したのはそれぞれ10.6% (157÷1476) と21.7% (5÷23) だった。

¹⁰総務省統計局「日本統計年鑑2024」(東京:総務省統計局,2023)429ページ,表19-1:就業状態別15歳以上人口,
<https://www.stat.go.jp/english/data/nenkan/73nenkan/zenbun/en73/book/index.html#page=462>

¹¹e-Stat, 統計で見る日本,「労働力調査」,表16:年齢階級別就業率,アクセス・計算:研究責任者,2024年1月25日
https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200531&tstat=000000110001&cycle=1&year=20240&month=12040604&tclass1=000001040276&tclass2=000001040277&result_back=1&tclass3val=0

¹²4.3%は、18歳から64歳までの人口に対して労働力人口から割り出された失業率である。これは、全年齢層を含むサンプル全体のなかで自分が無職だと回答した10.2%とは異なる。

¹³総務省統計局,「日本統計年鑑2024」(東京:総務省統計局,2023)429ページ,表19-1。

¹⁴厚生労働省,「2022年国民生活基礎調査の概況」,14ページ,<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/dl/14.pdf>

¹⁵相対的貧困率とは「貧困線以下で生活している人の割合」と定義されている。厚生労働省「2022年国民生活基礎調査の概況」2023年7月4日,14,16ページ,<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/dl/14.pdf>

¹⁶高齢女性に関する調査結果は、厚生労働省のデータを利用した別の調査に基づいており、以下の記事で報告されている:二階堂友紀,島崎周,根岸拓朗「高齢単身女性の4割貧困」『朝日新聞』2024年3月8日,<https://www.asahi.com/articles/ASS3832B7S33UTIL00B.html>

¹⁷厚生労働省,「2022年国民生活基礎調査の概況」,16ページ,<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/dl/14.pdf>

このような大まかな比較は、指標は異なるとはいえ、JWサンプル集団の方が一般集団よりも経済的に困難な状況にある人の割合が少ないことを示唆している。

JWJ-QSの調査結果は、経済的に困難な状況にある日本のエホバの証人の職業や学歴が多様であることを示している。例えば、生活が「大変苦しい（食べ物のお金すら十分でない）」と答えた173人のうち、17人（9.8%）は専門的・技術的職業に従事し、21人（12.1%）はサービス業に従事していた。また全員が正規の教育を受けており、内訳は、109人（63.0%）が高校を卒業、23人（13.3%）が専門学校を卒業、13人（7.5%）が大学を卒業していた。彼らの経済的困難は雇用形態や教育レベルとは関係がなく、むしろ日本の全体的な経済状況を反映している可能性がある。

会衆での役割。 JWサンプルの構成を理解するのに、回答者が宣教や会衆に関わる度合いを知るのには有用である。バプテスマを受けた男女は全て、エホバの証人の教えを他の人々に伝える無報酬の「奉仕者」である。調査回答者のほぼ半数（47.6%、3426人）は、毎月不特定の時間を宣教に費やす「伝道者」である。そして残りの半数（52.4%、3767人）は、「開拓者」として一定の時間、通常は月30時間か50時間、またはそれ以上を目標に活動していると答えた。公の宣教活動に加えて、一部の男性は長老や援助奉仕者として任命され、集会の進行や信者の信仰面での世話など、さまざまな方法で会衆を支えている。男性回答者のほぼ3分の2（65.0%、1355人）が、長老または援助奉仕

者として会衆の役割を担っている。日本のJWサンプルが会衆に関わる度合いは、他の研究者がこの宗教コミュニティの特徴として指摘した献身度の高さとも一致している。¹⁸

1355人の長老と援助奉仕者の経済状況の5段階評価では、89.3%（1210人）が中～高水準の経済状況を示す上位3段階を選び、7.8%（106人）がより低水準の経済状況を示す下位2段階を選んだ。同様に、より多くの時間を公の宣教活動に費やす「開拓者」3767人のうち、85.9%（3237人）が中～高水準の経済状況を選択し、10.2%（385人）が低水準の経済状況であると回答した。経済状況は、会衆での役割とは関連していなかった。

結論

JWJ-QSプロジェクトは、十分な研究が行われていない宗教団体に関して、調査に基づく情報を提供することで重要なニーズに応えている。無作為クラスター抽出法、全都道府県にわたる7000以上のサンプル数、一般人口に対応する地域分布、日本の宗教団体に特徴的な人口統計学的内訳は、本調査の対象集団が調査母集団の代表サンプルに非常に近いことを示している。大規模なサンプル、確かな方法論、包括的な調査デザインにより、日本のエホバの証人の見方、価値観、人間関係、幸福を研究するための質の高いデータを提供している。

¹⁸ ジョージ・D・クリサイデス、*「エホバの証人：新入門」* (Jehovah's Witnesses: A New Introduction) (ロンドン：ブルームズベリー・アカデミック、2022)

セクション2

宗教に関する見方や経験

このセクションでは、日本のエホバの証人についての定量的研究に基づき、宗教に関する見方や経験をj知るための重要な質問の回答から得られた、日本のエホバの証人 (JW) の主な特徴について解説する。

1. どのような人がエホバの証人になったのか。いつ、どのようにして、なぜそうなったのか。
2. どのような人が信仰するのをやめたか。一部の人が戻ってきたのはなぜか。
3. エホバの証人は、自分たちの会衆での生活、仲間の信者、社会全体をどのように捉えているのか。

調査結果から、日本におけるエホバの証人の成長、個人の改宗の特徴、個人がその宗教に魅力を感じた理由、社会との関係が明らかになった。

宗教の改宗には複雑でさまざまな要素が関係し、それは個人の核となるアイデンティティ、信念体系、対人関係に影響を与える。社会全体が特定の宗教団体や、ある生き方に従ってスピリチュアルな興味

を追求する人をどのように見なすかは、社会文化的な背景に左右される場合がある。¹ 1つの側面は、その文化が伝統的な規範への同調をどの程度重視するかということである。歴史を通じて、日本文化は一般的に協調性や集団の調和という価値観を重んじるとされてきた。² 最近の研究では、日本社会の個人主義的な傾向が指摘されているものの、集団主義的な特徴も依然として残っている。³

伝統的な信念体系はその1つの例として考えられる。1947年に施行された日本国憲法は、「日本の歴史上、初めて自由市場の宗教経済を生み出した」とはいえ、神道と仏教の実践と制度が依然として中心的なものであるのに対し、「キリスト教は少数派のままである」。⁴ 宗教団体の一員になるという決定には個人的、また社会的動機がいくつも絡んでいる。どの文化においても言えることだが、多くの人が疑いの目で見るとような少数派の宗教を、なぜわざわざ調べたり受け入れたりするのかを、一般の人々は理解できない場合がある。⁵

¹ルイス・R・ランポー、「宗教的回心の研究」(*Understanding Religious Conversion*) (New Haven, CT: Yale University Press, 1993.)

²例、ハリリー・C・トリアンディス、「個人主義と集団主義」(*Individualism and Collectivism*) (Boulder, CO: Westview Press, 1995.)

³荻原祐二、「日本における個性追求傾向の経時的変化とその心理的帰結の解明」、『心理学のフロンティア (仮訳)』("Temporal Changes in Individualism and Their Ramification in Japan: Rising Individualism and Conflicts with Persisting Collectivism," *Frontiers in Psychology*) 8 (May 2017) : 695, <https://www.frontiersin.org/journals/psychology/articles/10.3389/fpsyg.2017.00695>. 広田真一、中島清隆、筒井義郎、「人々の集団主義的行動の動機を分析した論文：日本とアメリカの比較」、『心と社会 (仮訳)』("Psychological Motivations for Collectivist Behavior: Comparison Between Japan and the U.S.," *Mind & Society*) 22 (August 2023) : 103–128, <https://link.springer.com/article/10.1007/s11299-023-00298-y>

⁴マーク・R・マリンス、「現代日本社会におけるキリスト教」、『現代日本宗教ハンドブック』("Christianity in Contemporary Japanese Society," in *Handbook of Contemporary Japanese Religions*)、インケン・ブロール、ジョン・ネルソン編 (Leiden, The Netherlands: Brill, 2012) , 136–137, https://doi.org/10.1163/9789004234369_007

⁵エリカ・バフェッリ、「日本における少数派宗教の構築と恐怖 (仮訳)」、『宗教・国家・社会 (仮訳)』("Fear and the construction of minority religions in Japan," *Religion, State & Society*) 51, no.3 (2023) : 223–237. ジェームズ・T・リチャードソン、「能動的改宗者vs受動的改宗者 – 改宗、勧誘研究におけるパラダイムの対立 (仮訳)」、『宗教科学研究ジャーナル (仮訳)』("The Active vs. Passive Convert: Paradigm Conflict in Conversion/Recruitment Research," *Journal for the Scientific Study of Religion*) 24, no.2 (1985) : 163–179, <https://www.jstor.org/stable/1386340>

宗教的な価値観やその宗教の継承における親の影響力は、多くの学術研究の対象になっており、その大半は米国で行われている。宗教や精神に対して、「思春期に最も近くで強い影響を与えるのは」親であるという点で、学術的に意見が一致している。⁶ ある宗教の伝統では、宗教的なアイデンティティは生まれた時に引き継がれると考えられている。一方、他の宗教では、子どもに儀式と伝統の実践を教えることが継承の主な方法とされているものもある。さらに別の宗教では、教理や行動規範を教えることが継承の主な手段となっている。

この定量的研究は、日本のエホバの証人が自主性を行使する機会があったかどうか、例えば、エホバの証人としてバプテスマを受けることを決定する前に費やした時間や学びについて尋ねたものである。JWの教理は「理にかなって」おり、「一貫している」と評する宗教社会学者もいる。⁷ その理由の1つは、エホバの証人としてバプテスマを受けるという決定が、通常その信条と実践の基礎となる（聖書的な）教理を学ぶ期間を経て行われるためである。その期間には、学んでいる人がJWの教理を受け入れ、その道徳基準に合わせて生きるかどうかを判断するため、教える人と学んでいる人の双方が多大な時間と労力を費やす。JWの親に幼少期からこの宗教を教えられて育った回答者は、この宗教に属する

という決定が、その信条と実践を理解した上でなされた個人の選択であったかどうかを回答している。

ある宗教に対して当初感じた魅力や献身の度合いは、時間の経過に伴って変化することがある。献身度を高く保って続けるには、その宗教から何を求められ、何を得られるかについて、分析を継続することが含まれる。⁸ 本研究では、エホバの証人に魅力を感じた当初の理由、入信の過程のさまざまな側面、また現在も信仰を続けている動機を調査している。他の宗教と同様に、JWコミュニティに属する理由は、本人の年齢、仲間の信者、家族の信者の世代によって異なるかもしれない。例えば、家族で最初にエホバの証人になった人は、JWの親族がいる第2世代よりもサポートを得られないことが多い。研究結果は、JWの親を持つ人と持たない人のそれぞれの割合と、これら第1世代と第2世代の改宗者によるJWコミュニティが時間の経過に伴って拡大してきた様子を定量化したものである。

日本では最近、少数派の宗教と第2世代（2世）に関する論争によって、親から子への宗教的信条の継承のあり方について疑問が生じている。前述したように、さまざまな宗教団体において、親が子どもの宗教に対する姿勢に強い影響を与えることは研究者によって明らかにされている。⁹ 世代から世代への

⁶ アネット・マホーニー、「子どもの宗教性・スピリチュアリティの発達科学（仮訳）」（*The Science of Children's Religious and Spiritual Development*）（Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2021）42, <https://doi.org/10.1017/9781108874342>。メタ分析については、以下参照。メラニー・スターンズとクリフ・マッキニー、「親子の宗教的関連性 - 親と子の性別に関するメタ分析（仮訳）」、『家族心理学ジャーナル（仮訳）』（“Connection Between Parent and Child Religiosity: A Meta-Analysis Examining Parent and Child Gender,” *Journal of Family Psychology*）33, no.6 (2019) : 704-710, <https://doi.org/10.1037/fam0000550>

⁷ ジェームズ・A・ベックフォード、「預言のラッパ（仮訳）」（*The Trumpet of Prophecy*）（New York: John Wiley & Sons, 1975）119。ブライアン・R・ウィルソン、「日本における『エホバの証人』の発展と親族関係の諸問題」、『社会的羅針盤（仮訳）』（“Aspects of Kinship and the Rise of Jehovah's Witnesses in Japan,” *Social Compass*）24, no.1 (1977) : 100。

⁸ ヴァンリス・サログラーほか、「信仰、絆、行動、帰属 - 文化を超えた宗教性の認知的、感情的、道徳的、社会的側面（仮訳）」、『異文化心理学ジャーナル（仮訳）』（“Believing, Bonding, Behaving, and Belonging: The Cognitive, Emotional, Moral, and Social Dimensions of Religiousness Across Cultures,” *Journal of Cross-Cultural Psychology*）51, nos.7-8 (2020) : 551-575, <https://journals.sagepub.com/doi/10.1177/0022022120946488>

⁹ アダム・ジェマー、「親の影響と宗教的信念、態度、実践の世代間継承：米国における最近のエビデンス（仮訳）」、『宗教（仮訳）』（“Parental Influence and Intergenerational Transmission of Religious Belief, Attitudes, and Practices: Recent Evidence from the United States,” *Religions*）14, no.11 (2023) : 1373, <https://doi.org/10.3390/rel14111373>。ジェシー・スミス、「家族における信仰の継承 - 宗教的イデオロギーの影響（仮訳）」、『宗教社会学（仮訳）』（“Transmission of Faith in Families: The Influence of Religious Ideology,” *Sociology of Religion*）82, no.3 (Autumn 2021) : 332-356, <https://doi.org/10.1093/socrel/sraa045>

宗教の継承に影響を与える要因として、親子の関係性、家族の保守的傾向、宗教的価値観、信条の実践とコミュニケーションの一貫性、宗教的交流における祖父母の役割などが挙げられる。¹⁰ 継承が成功するかは、親と子の性別も重要であることが示されており、一般的に父親よりも母親の影響が強く、娘よりも息子の方が継承しやすい傾向がある。¹¹ 同様に、日本人の非伝統的な宗教への改宗に関する研究も、世代を超えて同じ宗教に属している場合、親の宗教的影響、特に母親の影響が強いことを示している。¹²

エホバの証人の改宗に関して、非キリスト教文化圏のJW家族における世代間の継承について、ある民族誌的研究は、JWの親を持つ子どもたちがエホバの証人になり、それを続けていくという決定をしたのは、ある決定的瞬間ではなく、時間をかけて学び、教えが理にかなって役立つという結論に至った結果であると示している。¹³ 今回の日本におけるJWの調査は、回答者の家族構成や世代が多様であったため、世代間の宗教的継承の様子を検討する機会となった。

世界において、若年層では宗教に入信し、信仰を継続する人は減少しており、個人主義が台頭している。¹⁴ 生活の中で宗教を大切にすることは必ずあり、より個人的な探求のために組織宗教から離れる人が多い時代にあつて、疑念や失望のために宗教コミュニティを離れる信者が現れることも予想される。またその価値観や活動に対する献身や実践をやめる信者もいる。宗教団体、特により小さな、または新しい団体からの脱会は、宗教学者の間で重要な研究テーマとなっている。¹⁵ 研究結果によると、エホバの証人のコミュニティから一時的に離れ、その後交友を再開した人もいる。まだ十分に研究されていないが、この研究で探求されたテーマは宗教から離れ、その後戻ってくる人の過程や理由である。

自分がある宗教に属していると明らかにすることは、その人個人が信条を高く評価しているだけでなく、その宗教がどのように支援してくれるか、対人関係にどのような影響を与えるか、他人がその宗教をどう見ているかを考察することも含まれる。家族や友人、他人と違っていることは、緊張を高める原因になりかねない。それに対して、共通の信条、帰属意識、相互支援は、絆を深める効果がある。¹⁶

¹⁰クリストファー・D・ベイダー、スコット・A・デズモンド、「言う通りにし、する通りにする – 一貫した親の信念と行動が宗教の伝達に与える影響（仮訳）」、『宗教社会学（仮訳）』（“Do as I Say and as I Do: The Effects of Consistent Parental Beliefs and Behaviors upon Religious Transmission,” *Sociology of Religion*） 67, no.3 (Fall 2006) : 313–329, <https://doi.org/10.1093/socrel/67.3.313>。スミス、「信仰の継承」（“Transmission of Faith”）、バーン・L・ベングトソン、「宗教は世代を超えてどのように受け継がれるか（仮訳）」、第5章「家族と信仰（仮訳）」、『祖父母と曾祖父母の意外な重要性（仮訳）』（“The Unexpected Importance of Grandparents (and Great-Grandparents.”) (chap.5 in *Families and Faith: How Religion Is Passed Down Across Generations*) (New York: Oxford University Press, 2013)。

¹¹親の影響の証拠については、ロリ・ベイカー・スペリー、「信仰の継承：宗教の伝達における父親の役割（仮訳）」、『社会学的焦点（仮訳）』の中で論じられている。（“Passing on the Faith: The Father’s Role in Religious Transmission,” *Sociological Focus*） 34, no.2 (2001) : 185–198, <https://doi.org/10.1080/00380237.2001.10571190>

¹²杉山幸子、「日本の新宗教団体における宗教志向への親の影響（仮訳）」、『東北サイコロジカ・フォリア（仮訳）』（“Parental Influence Upon Religious Orientation in a Japanese New Religious Group,”） (*Tohoku Psychologica Folia*) 49 (1990) : 90–96。

¹³アルノー・シマール・イーモンド、「先住民のエホバ教への改宗の理解：キティガン・ジビ・アニシナベグの場合（仮訳）」、『社会的羅針盤（仮訳）』（“Understanding Conversion to Jehovahism among Indigenous Peoples: The Case of the Kitigan Zibi Anishinabeg,” *Social Compass*） 70, no.2 (2023) : 283–303, <https://doi.org/10.1177/00377686231182499>

¹⁴ピュー研究所、2019年6月13日、「世界の宗教における年齢格差（仮訳）」（“The Age Gap in Religion Around the World”）, <https://www.pewresearch.org/wp-content/uploads/sites/20/2018/06/ReligiousCommitment-FULL-WEB.pdf>。荻原祐二、内田由紀子、楠美孝、「日本人は個人主義をどう捉えているのか？日本の個人主義についての考察（仮訳）」、『心理学（仮訳）』（“How Do Japanese Perceive Individualism? Examination of the Meaning of Individualism in Japan,” *Psychologia*） 57, no.3 (2014) : 213–223, <https://doi.org/10.2117/psysoc.2014.213>

¹⁵ハインツ・シュトラブほか、「脱改宗の再考 – 10年後の伝記研究と心理測定分析（仮訳）」 (*Deconversion Revisited: Biographical Studies and Psychometric Analyses Ten Years Later*) (Göttingen, Germany: Vandenhoeck & Ruprecht / Brill Deutschland GmbH, 2022) , <https://doi.org/10.13109/9783666568688>

¹⁶ジュード・メアリー・セナほか、「異文化コミュニティのレジリエンス尺度 – COVID-19の文脈における心理測定特性と多国籍の妥当性（仮訳）」、『心理学のフロンティア（仮訳）』（“The Transcultural Community Resilience Scale: Psychometric Properties and Multinational Validity in the Context of the COVID-19 Pandemic,” *Frontiers in Psychology*） 12 (August 2021) , <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.713477>。サログラーほか、「信仰、絆、行動、帰属（仮訳）」（“Believing, Bonding, Behaving, and Belonging.”）

宗教に関する日本人の見方についてのある調査は、宗教、特に仏教以外の宗教に対する不信感が高まっていることを明らかにしている。¹⁷ 少数派宗教に対する差別は、偏ったメディア報道やネット上の偽情報、ヘイトスピーチにあおられ、至るところで見られるようになってきている。そうした不確かな情報に影響を受けた人々の見方は、世代を超えて家族を分裂させ、信教の自由を脅かす。

このセクションで報告されている主な調査結果には、日本におけるエホバの証人の時間の経過に伴う増加、バプテスマを受ける前の学びの期間、宗教コミュニティからの支援の認識、人間関係の変化、宗教に属することによる差別の経験などが含まれる。その結果、エホバの証人にとって宗教の実践は生活全般に関わっていることを示している。

エホバの証人になる

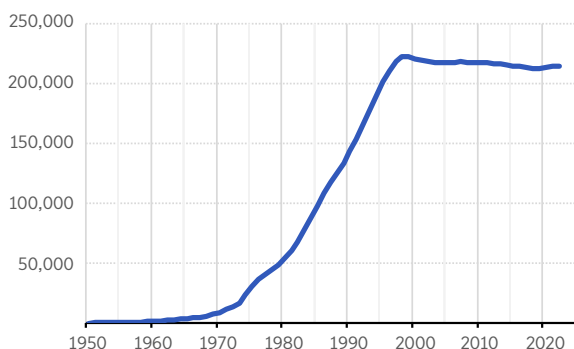
どんな人が、いつ、どのようにして、なぜ

日本においてエホバの証人は、戸別訪問や街中で会う人に信仰を伝える活動で知られている。しかし西洋でも、キリスト教国でもない日本の文化的、歴史的背景を考えると、JWのメッセージが受け入れら

れたことは意外なことであった。調査結果から、日本におけるエホバの証人の成長、個人の改宗の特徴、個人がその宗教に魅力を感じた理由が明らかになった。

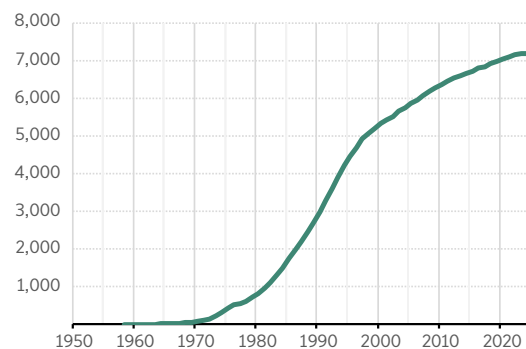
日本におけるエホバの証人の増加。 日本におけるエホバの証人の経年変化を調べるため、JWの公式報告とJWJ-QSのデータを比較した。JWの年次報告書には、年間の平均伝道者数が記載されており、過去70年間の日本のJWの人数の変化を知ることができる。¹⁸ (図2.1参照) 7193人の回答者の調査データを使用し、年ごとのバプテスマを受けた人の数を累計すると、時間の経過に伴うJWの増加の近似値が得られた。(図2.2参照) 調査データには、死亡者や交友をやめた人は含まれていないものの、その結果はJWの公式報告と同様であり、主に1970年代、1980年代、1990年代初頭に急激な増加が見られる。またバプテスマ数は1990年代以降も着実に増え続けている。JWの年次報告書によると、過去20年間、伝道者数はほとんど変化していない。日本の人口増加率が0.19%から-0.53%へとわずかに低下した2002年から2022年までの20年間に、日本のエホバの証人のバプテスマ数は着実に増加していた。¹⁹

図 2.1. JW 日本のエホバの証人の年間平均伝道者数 (1950年～2022年)



出典：ニューヨーク法人ものみの塔聖書冊子協会、年次報告書(1950年～2023年)
注：「伝道者」とは、公の宣教に定期的に参加している信者のこと。

図 2.2. JW サンプル集団の年別バプテスマ人数の累計 (1958年～2024年)



注：回答者7193人のサンプル全体から、年別のバプテスマ人数を累計した。調査データには死亡者や交友をやめた人は除外されている。

¹⁷ 「日本のデータ - 日本における宗教への不信感の高まり (仮訳)」 (Japan Data: Distrust in Religion Rises in Japan), Nippon.com, April 18, 2023, 築地本願寺の調査に基づく, <https://www.nippon.com/en/japan-data/h01645/>

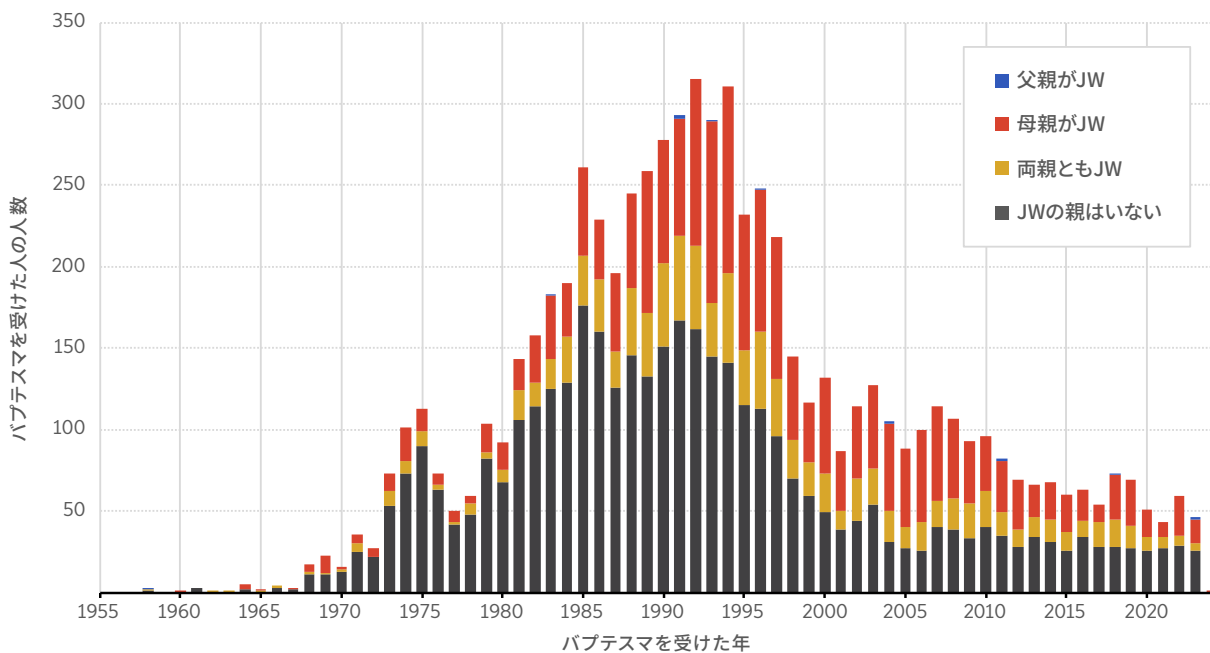
¹⁸ 定期的に他の人に自分の信念を伝えるエホバの証人は「伝道者」と見なされる。この用語は、神の王国の良い知らせを積極的に知らせる、つまり伝道する人を指す。エホバの証人の組織は、単にその宗教を自認したり、礼拝に出席したりするだけの人を「会員」として数えることはしない。

¹⁹ 「日本の人口増加率 1950-2024」 (“Japan Population Growth Rate 1950-2024”), Macrotrends (website), <https://www.macrotrends.net/global-metrics/countries/JPN/japan/population-growth-rate>, 2024年8月3日にアクセス。

親がJWの場合とJWではない場合。この調査では「あなたの親はエホバの証人ですか」という質問に対し、答えが「はい」の場合、そのJWの親は、父親か母親か、あるいは両親ともJWか、いずれかの回答を求めた。これらのデータを用いて、図2.3は、回答者がバプテスマを受けた年ごとの人数を、親がJWの場合とJWではない場合に分けて示している。エホバの証人の初期の数十年間にバプテスマを受けた人のうち、JWの親を持つ人は、後年にバプテスマを受けた人に比べて少なかった。後年には少なくとも片方の親がJWである人が増加している。(7193人の回答者のうち1.5% [108人] は2つの質問に対し無回答だった)。

全サンプルのうち半数以上 (53.5%, 3847人) は両親ともJWではなかった。JWの親を持つ45.9% (3300人) のうち、14.8%は両親ともJWだった。また30.1%は母親がJWであり、父親はJWではなかった。逆に、父親がJWであり、母親がJWではない回答者はわずか10人 (0.1%) だった。回答者の多く (44.9%) にJWの母親がいて、そのほとんどが宗教的に分裂した家庭で育ったという調査結果は、子どもが宗教を選ぶ際に、JWの母親が大きな影響を与えたことを浮き彫りにしている。

図 2.3. エホバの証人の親を持つ人と持たない人の年別のバプテスマ人数 (1955年～2024年)



注: n=7,085 (「答えたくない」[PNA]と回答した108人は除く)。

- ・日本のエホバの証人の初期には、JWの親を持つ人の割合は低い。
- ・時間の経過に伴い、JWの両親を持つ人の割合は増加した。
- ・日本のJWの約半数 (44.9%) がJWの母親を持つ。

JWの親を持つ人（3300人）に、少なくとも片方の親がエホバの証人になった時、自分が何歳だったかを尋ねた。回答選択肢は、乳児（生後11カ月以下）、幼い子ども（1～6歳）、小学生（7～12歳）、若者（13～17歳）、若い大人（18～23歳）、24歳以上とした。表2.1が示すように、19.4%が乳児の時、36.1%が幼い子どもの時と回答し、約半数が6歳以下の時点で親がJWになっている。4分の1（25.0%）は、自分が小学生の時に親がエホバの証人になったと回答した。

親（母親）が異なる宗教に改宗するのは、思春期の子どもにとって受け入れにくいことであるにもかかわらず、回答者の約10分の1（8.5%）が、10代でそうした状況を経験した。注目すべきは、親がエホバの証人になった時、回答者の11.0%が成人（18歳以上）だったことである。これらの数字は、親からの強い影響や、親子関係において宗教的信条が双方向に継承または強化される可能性を示しており、先に引用した世代間の宗教的継承に関する学術文献とも一致する。²⁰

表 2.1. 親がエホバの証人になった時の回答者の年齢

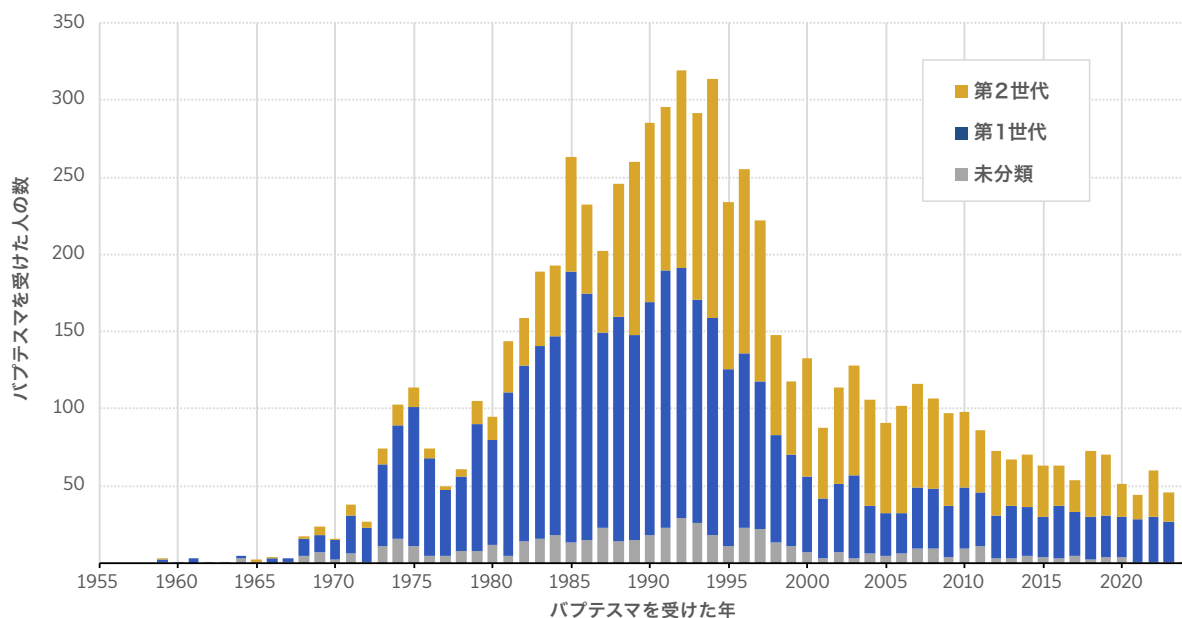
年齢層	親がJWになった時のサンプル分布 (n=3,300)	
	人数 (n)	割合 (%)
乳児 (生後11カ月以下)	640	19.4
幼い子ども (1～6歳)	1,190	36.1
小学生 (7～12歳)	825	25.0
若者 (13～17歳)	281	8.5
大人 (18歳以上)	364	11.0

²⁰脚注9から12を参照。

エホバの証人の世代。この調査データでは、回答者がバプテスマを受けた年と、親がエホバの証人になった時の回答者の年齢を基に、サンプル内でのJW第1世代と第2世代の割合を分析できた。

JWの親がいないと答えた人をJW第1世代と見なし、JWの親がいると答え、親がエホバの証人になった後にバプテスマを受けた人をJW第2世代と見なす。サンプル人口の約半数（53.5%、3847人）がJW第1世代であった。回答者の3分の1以上（38.9%、2797人）がJW第2世代であった。また回答者の7.6%（549人）を未分類とした。その中には、「答えたくない」を選択した人、またバプテスマを受けたのが親の前か後かがはっきりしない人が含まれる。図2.4は、時間の経過に伴うエホバの証人の世代構成の変化を示している。

図 2.4. エホバの証人の第1世代と第2世代 (1955年～2024年)



注: 第1世代(n=3,847, 53.5%), 第2世代(n=2,797, 38.9%), 未分類(n=549, 7.6%)。

エホバの証人の会衆は第1世代と第2世代の両方で構成されている。

表2.2は、世代間の顕著な違いを示している。第1世代は高齢で（現在の平均年齢66.9歳）、バプテスマを受けた年齢も高い（バプテスマ時の平均年齢35.5歳）。第2世代は若く（現在の平均年齢43.3歳）、バプテスマを受けた年齢も低い（バプテスマ時の平均年齢17.9歳）。第1世代は女性が多い（79.5%）のに対し、第2世代の女性は59.6%であった。第1世代の男性は20.5%であったが、第2世代の男性は40.4%に倍増した。

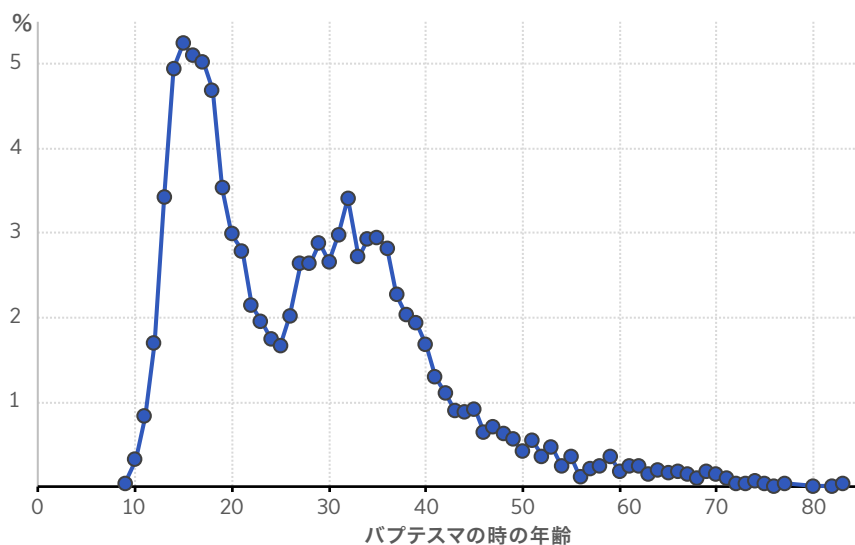
表 2.2. エホバの証人の第1世代と第2世代の平均年齢

世代	サンプル全体 (n=7,193)		現在の年齢	バプテスマ時の 年齢
	人数 (n)	割合 (%)	平均 (年齢)	平均 (年齢)
JW 第1世代	3,847	53.5	66.9	35.5
JW 第2世代	2,797	38.9	43.3	17.9
未分類	549	7.6	54.8	23.1

注:未分類にはPNA回答者とバプテスマを受けたのが親の前か後かがはっきりしない人が含まれる。

バプテスマを受けた年齢。調査結果によると、回答者のバプテスマ年齢は9歳から83歳と幅広い。図2.5は、回答者がバプテスマを受けた時の年齢の割合を示したものである。全サンプルの平均バプテスマ年齢は27.7歳、男性の平均は25.4歳、女性の平均は28.7歳であった。回答者の4分の1強（26.6%）は18歳以前にエホバの証人になり、58.4%は若年（18歳～39歳）でバプテスマを受け、12.6%は中年（40歳～59歳）でバプテスマを受け、2.3%は高齢（60歳以上）でバプテスマを受けた。晩年にバプテスマを受けた167人のうち、11人が75歳以上であった。エホバの証人にとって、年齢はバプテスマを受ける時期を決定する要因ではない。

図 2.5. エホバの証人のバプテスマ時の年齢（割合）



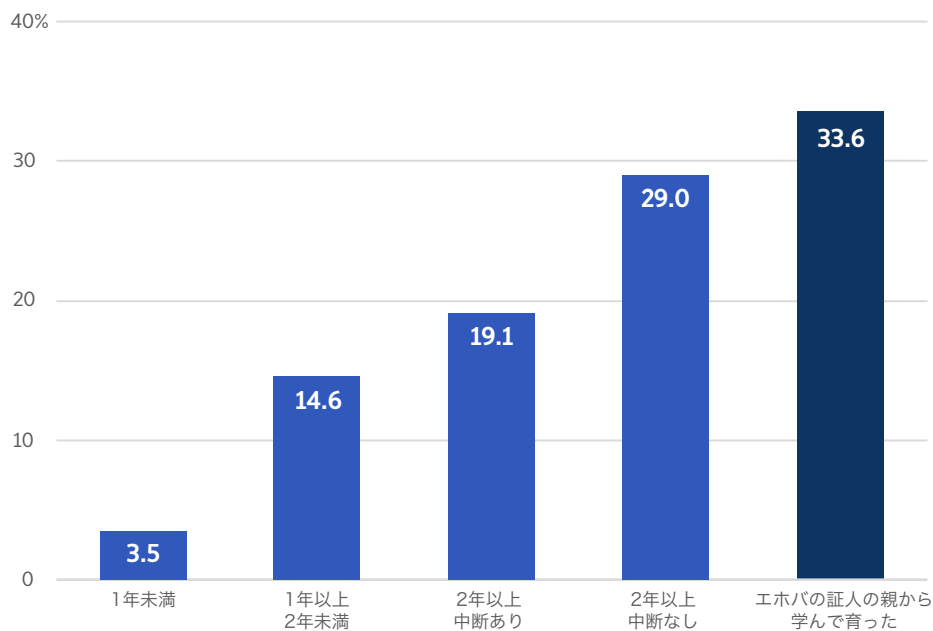
注:n=7,193

バプテスマを受ける前の学びの期間。エホバの証人としてバプテスマを受けるかどうかの決定は、かなりの時間と学びを経た後になされる。図2.6は、回答者がバプテスマを受ける前に費やした学びの期間を示している。JWの親または保護者からJWの教えについて学んだのは、回答者の3分の1 (33.6%) だった。親以外の信者と2年以上学んだ約半数

(48.1%) のうち、継続的に学んだのは29.0%、断続的に学んだのは19.1%であった。1年から2年間学んだのは、少数で14.6%であった。学んだ期間が1年未満であると回答したのは、わずか251人 (3.5%) であった。第2世代の大多数 (81.3%) は、JWの親から聖書を学んで育った。

図 2.6. バプテスマを受ける前に教理を学ぶために費やした時間

バプテスマを受けるまでにエホバの証人と何年ぐらい聖書を勉強しましたか。



回答者はエホバの証人になる前に、ある程度の期間聖書を学んでいた。

注: n=7,193。PNA回答 (n=14, 0.2%) はこの図から除外されている。

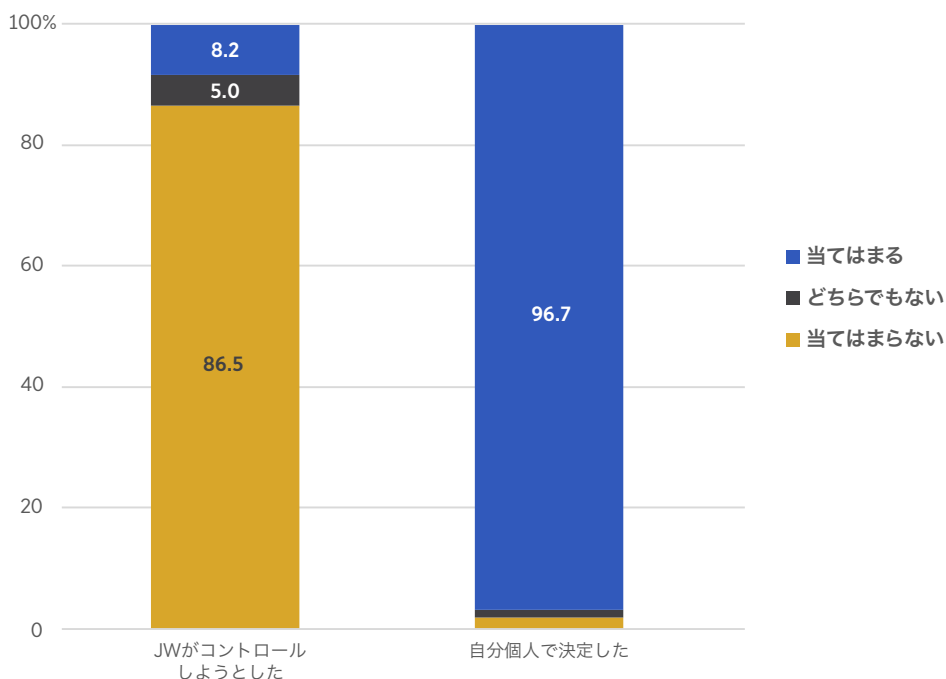
エホバの証人との学びに関する認識。この調査の中で、回答者はJWとの学びに関する認識を問う6つの記述に対して、「当てはまる」または「当てはまらない」の5段階で評価した。特に2つの記述では、エホバの証人になることを自分個人で決定したか、また、JWが自分をコントロールしようとしているのを感じたかを尋ねている。

- エホバの証人は自分をコントロールしようとしているのを感じた。
- エホバの証人になることを自分個人で決定した。

図2.7によると、大多数（96.7%）がエホバの証人になることを自分個人で決定したと答え、この点に同意しなかったのはわずか1.8%だった。同様に、86.5%が聖書を学んでいる間、JWが自分をコントロールしようとしているとは感じていなかった。またコントロールしようとしたと感じた比較的小数（8.2%）の人であっても、その多くは聖書を学ぶ過程で高い自主性を持っていたことを示している。

図 2.7. エホバの証人と学んでいた時の認識 - 個人の選択かコントロールされたか

エホバの証人と聖書を学んでいた時の状況について



エホバの証人になることは個人の決定だと認識していた。

注：n=7,193。PNA回答はこの図から除外されている。

学んでいた時の状況に関する回答者の認識について理解を深めるため、調査には以下の記述が含まれていた。

- エホバの証人が自分に親切にするのは、主に自分を改宗させるためだと感じた。
- エホバの証人になるために家族との関係を絶たなければならなかった。
- エホバの証人の教えを信じるようにという圧力を感じた。
- 疑問点を話して質問できた。

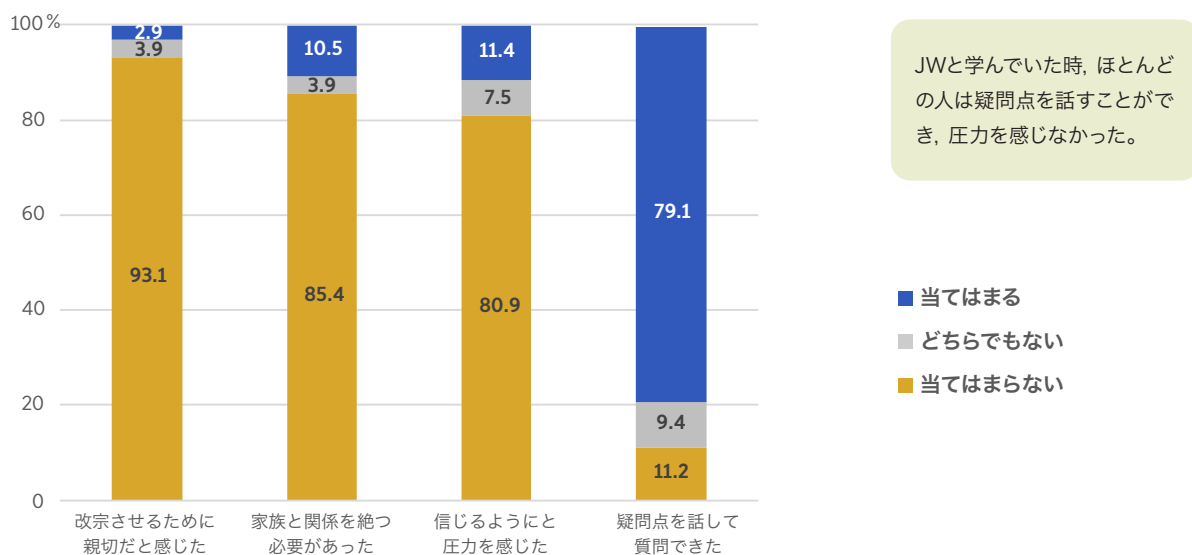
図2.8に示すように、回答者は「圧力を感じた」という記述に対し、80.9%が同意しなかった。また「JWが親切にするのは主に自分を改宗させるためだと感じた」という記述には93.1%が同意しなかった。宗教を変えることは家族内で対立の原因になることもあるが、ほとんどの人（85.4%）はエホバの証人と学んだからといって、「家族関係を絶つ」ことにはならなかったと答えた。4分の3（79.1%）が、学んでいる時に「疑問点を話して質問できた」ことに同意している。

今の会衆が自由で明るくて心が広くてとても気に入っている。
……昔は良くも悪くも日本人的生真面目さや厳しさがあった。
外国のJWとのギャップも感じた。

—男性, 50代, 第1世代

図 2.8. エホバの証人と学んでいた時の状況に関する認識

エホバの証人と聖書を学んでいた時の状況について



注：n=7,193。PNA回答はこの図から除外されている。

第1世代と第2世代の回答を比較しても同様の結果であった。聖書を学んでいる時、「JWが自分をコントロールしようとしているのを感じた」のは、どちらの世代も10分の1以下であった（それぞれ7.3%、9.7%）。一方、「エホバの証人になることを自分個人で決定した」という記述には、どちらの世代も同意している（それぞれ97.3%、96.2%）。「疑問点を話せた」（それぞれ79.2%、78.3%）、「親切にするのは自分を改宗させるためだと感じた」（それぞれ3.1%、2.5%）と答えた人の割合は、第1世代と第2世代でほとんど差がなかった。

学生時代、自らの意志で聖書の勉強やエホバの証人の集会に出席するのを辞めていた時期があります。それでも母親は、私を無理強いすることは一切なく、私の決定を尊重し、引き続き愛情を持って育ててくれました。

—男性, 40代, 第2世代

エホバの証人の当初の魅力と現在の魅力。エホバの証人の宗教に対する当初の魅力と現在の魅力を理解するために、関連する2つの質問それぞれに、同じ選択肢の中から回答してもらった。²¹ 質問は次の通りである。

- 宗教にひかれる理由は人それぞれです。最初、エホバの証人のどんなところに魅力を感じましたか。
- 宗教を続ける理由は人それぞれです。現在、エホバの証人のどんなところに魅力を感じていますか。

どちらの質問に対しても、次の11項目の中から3つまで選択することができた。「道徳的な指針に魅力を感じた」、「教えが論理的であることに魅力を感じた」、「聖書についてもっと学びたかった」、「より良い人生の選択をしたかった」、「エホバの証人の家族

がいた」、「エホバの証人の心優しい人柄に魅力を感じた」、「神ともっと親しくなりたかった」、「将来に希望を持ちたかった」、「エホバの証人にならないと、家族や友人に拒絶されると思った」、「家族関係のことで助けてほしかった」、「宗教儀式に魅力を感じた」。

エホバの証人が自分の宗教に魅力を感じる理由はさまざままで、当初と現在ではいくらか変化が見られる。図2.9は、回答者がエホバの証人に対する当初の魅力と現在の魅力として選んだ上位3項目の割合を示している。（比較のため、どちらの質問に対しても「どれでもない」および「答えたくない」の回答〔合計188人〕は含まれていない。）

「教理の論理性」は、魅力を感じた点として当初でも（37.8%）現在でも（43.0%）、選択した人が特に多かった3つの項目のうちの1つであった。当初から現在への変化の割合が最も大きかった2つの項目は、次の通りである。「JWの家族がいる」を選んだのは、当初は3分の1以上（36.9%）だったが、現在は10分の1以下（9.3%）であった。また「神ともっと親しくなれる」を選んだのは、当初は5分の1以下（17.3%）だったが、現在は3分の2（66.5%）であった。

「JWの心優しい人柄」を選んだ回答者は、当初の魅力として39.8%、現在は23.2%だった。「将来への希望が持てる」を選んだのは、当初の魅力として27.5%、現在は40.6%であった。

4分の1以上の回答者が当初と現在の魅力として選んだその他の項目は、「より良い人生の選択ができる」（それぞれ33.2%、36.4%）、「道徳的指針」（それぞれ24.5%、35.3%）、「聖書についてもっと学べる」（それぞれ27.5%、31.5%）であった。

²¹魅力測定項目リストは、カザフスタンとルワンダにおけるエホバの証人についての別の研究で使用されたものを採用した。アルディヤール・アウエズベク、セイク・ペイセンバエフ、「カザフスタン共和国におけるエホバの証人の見解、価値観、信念：調査結果の分析報告（仮訳）」（*Views, Values and Beliefs of Jehovah's Witnesses in the Republic of Kazakhstan: Analytical Report on the Results of the Study*）（Astana, Kazakhstan, 2023）。V・ンクリキインカ、J・チュー、「ルワンダにおけるツチ族に対する大量虐殺の間にエホバの証人になる - 信仰、許し、家族に関する心理社会的要因（仮訳）」（*Jehovah's Witnesses During and After the Genocide Against the Tutsi in Rwanda: Psychosocial Factors Related to Faith, Forgiveness, and Family*）（forthcoming, Autumn 2024）。

注目すべき点は、「宗教的儀式」を当初と現在の魅力として選んだのが、いずれも0.5%未満だったことである。改宗しなければJWの家族や友人から拒絶されるのではないかという懸念を示したのはわずか2.5%で、エホバの証人を続ける理由としてこれを選んだ人は1%未満であった。

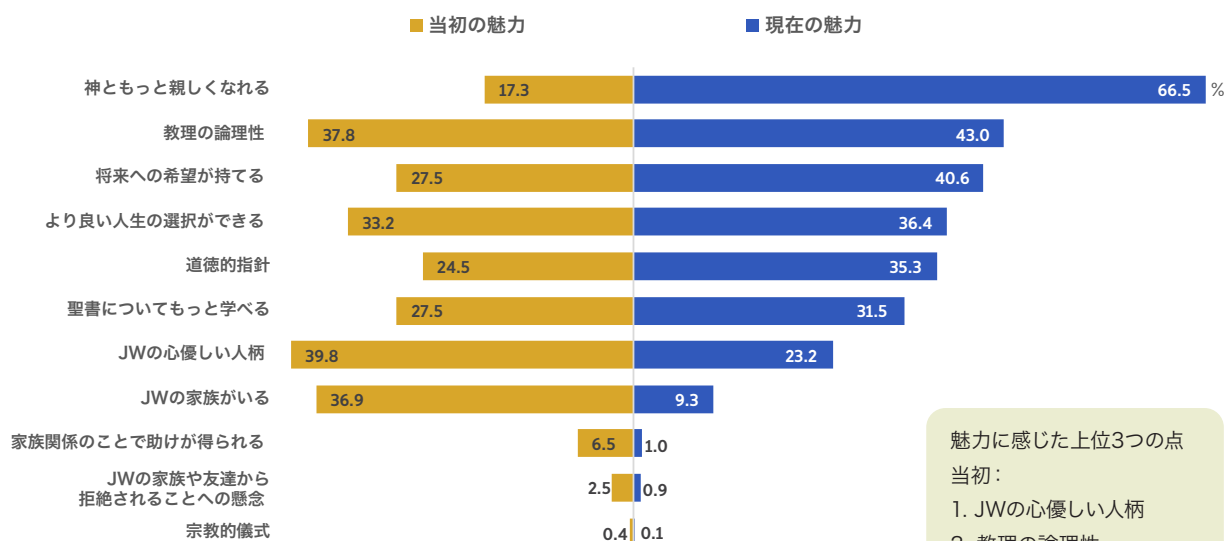
聖書を学ぶきっかけは、学生時代、学校にいるエホバの証人の良い行状、さわやかな雰囲気に惹かれたからでした。2世の子供たちは学校でみんなと違って、私の目から見てとても素敵でした。ああなりたいたいと思って、レッスンを申し込みました。

—女性, 30代, 第1世代

図 2.9. エホバの証人の当初の魅力と現在の魅力

当初, エホバの証人のどんなところに魅力を感じましたか。

現在, エホバの証人のどんなところに魅力を感じていますか。



魅力を感じた上位3つの点

当初:

1. JWの心優しい人柄
2. 教理の論理性
3. JWの家族がいる

現在:

1. 神とっと親しくなれる
2. 教理の論理性
3. 将来への希望が持てる

注: このデータ分析は同一の回答者集団 (n=7,005) の当初と現在の魅力についての比較である。

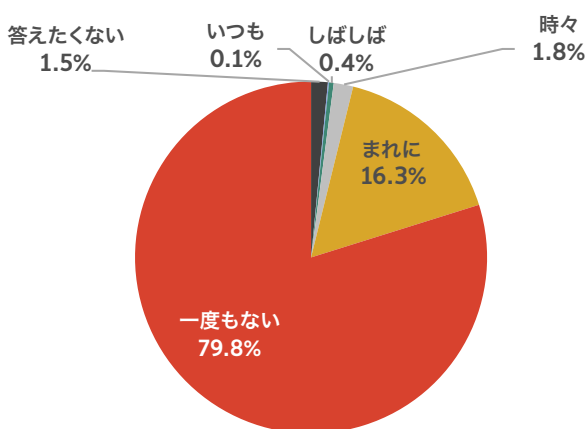
エホバの証人をやめたことがあるか、またはエホバの証人であることを後悔することがあるか

本調査結果によると、日本のエホバの証人は高い安定性と献身度を示しており、信者のほとんどが中断することなく組織にとどまっている。全サンプルのうちの大多数（95.8%）は、バプテスマを受けてエホバの証人になった後に宗教的交友をやめたことは一度もないと答えており、少数（268人、3.7%）は、以前に交友をやめたものの、後に再び交友を持つようになったと回答している。²² 交友をやめて、その後に戻ったと答えた人のうち76.1%（204人）が女性で、23.9%（64人）が男性であった。全サンプル（女性の割合が高い）のうち、女性回答者全体の4.0%、男性回答者全体の3.1%が、エホバの証人との交友を一時的にやめたことがあると回答した。

エホバの証人であることを後悔することがあるか、という質問への回答にも同様のパターンが見られ、「一度もない」（79.8%）または「まれに」（16.3%）しかないと答えた回答者は全体の96.1%であった（図2.10参照）。「しばしば」または「いつも」と答えた回答者は40人（0.6%）のみで、他の129人（1.8%）が「時々」と回答した。

図 2.10. 入信に対する後悔

エホバの証人であることを後悔することがありますか。



日本のエホバの証人の大多数（96%）は、JWであることを後悔することは「一度もない」または「まれに」しかない。

注:n=7,193

²²個人は不活発になる（会衆の宣教活動や集会に参加しなくなる）ことによって、宗教的関係を断つことができる。不活発になった人に対する会衆の制裁はない。バプテスマを受けた信者が重大な違反（性的不道徳、暴力、薬物乱用など）を犯して、会衆の長老の援助にもかかわらず生き方を改めない場合、その人は会衆から除かれる可能性がある。除かれることにより他の信者との宗教的、社会的交流が制限される（同居家族など、家族関係や責任が伴う場合を除く）。それらの人も会衆の集会に出席することができ、長老の援助を求めることができる。また過ちを認め、悔い改めて、悪い行いをやめるなら、会衆に復帰することもできる。詳しくは、ものみの塔2024年8月号に掲載されている研究用の4つのシリーズ記事を参照（<https://www.jw.org/ja/ライブラリー/雑誌/ものみの塔-研究用-2024年8月/>）。

離脱と復帰

誰がやめるのか、どうして戻ってくるのか

本調査では、バプテスマを受けた後、中断することなくエホバの証人であり続けた人と、中断してから再びエホバの証人のコミュニティと交友を持つようになった人の割合を調べた。交友をやめたことがあると回答した268人（全サンプルの3.7%）には、中断がいつまで続いたか、またどのような理由で会衆に戻ったのかを尋ねた。268人の回答者のうち、97人は第1世代、150人は第2世代で、21人は分類できなかった。

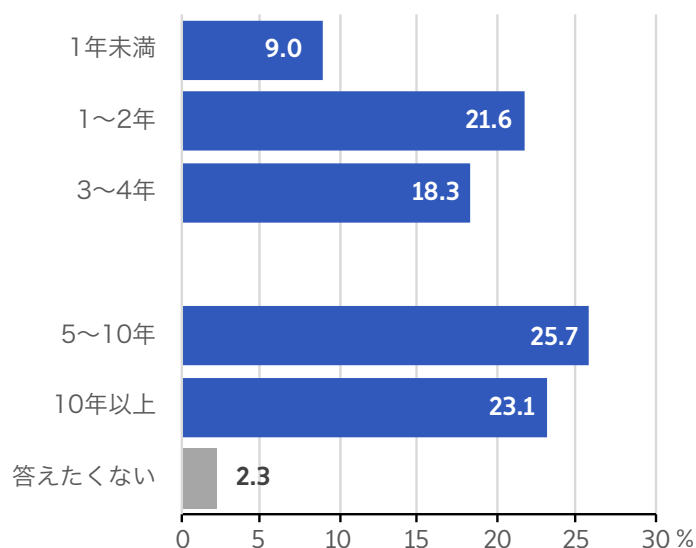
中断の期間。本調査では、エホバの証人との交友をやめたことがある人に、どのくらい中断していたかを尋ねた。回答の選択肢は、「1年未満」、「1～2年」、「3～4年」、「5～6年」、「7～8年」、「9～10年」、「10年以上」であった。図2.11が示すように、交友をやめたと答えた人のうち、ほぼ3分の1（30.6%）が2

年以内に、ほぼ半数（48.9%）が4年以内に交友を再開した。4分の1が5年から10年以内に、ほぼ4分の1が10年以上の中断後に交友を再開している。この数字を第1世代と第2世代で比較したところ、交友をやめてから4年以内に再開した回答者の比率は、第2世代の55.3%に対し、第1世代は38.1%であった。

子どもの頃から窮屈で厳しいこの組織がずっと嫌で、20歳になった時に辞めました。やっと解放されたと思いました。ただ、聖書の教えは正しいし正確だと思っていました。色々あり、戻ってこようと決めました。自分がこの組織に戻るなんて決まっていなかったのに戻りました。でも私は今とても幸福な人生を歩んでいます。エホバに近づくことが再びできて本当に幸せです。

—女性、40代、第2世代

図 2.11. エホバの証人との交友をやめていた期間



- 交友をやめた人のうち、ほぼ3分の1が2年以内に再び交友を持つようになった。
- 半数が5年以内に戻った。

注: この統計は、一時的にエホバの証人であることを中断していた回答者のサブグループ (n=268) に基づいている。

JWとの交友を再開した年。本調査では一時的に交友を中断したことがある人に、「覚えている限りで、何年にエホバの証人の活動を再開しましたか」という質問をした。JWとの交友を中断していた268人のうち、239人が再開した年を回答した。表2.3が示すように、4分の3が2000年以降に戻ってきている。交友を再開した人が最も多かった年は2018年（16人）だった。交友を中断し、再開した人のほとんどは、その後何年も、あるいは何十年もエホバの証人を続けている。

表 2.3. 交友を再開した年代

年代	人数 (n)	中断したことがある人 (n=239) に対する割合 (%)
1980年以前	5	2.1
1981年～1990年	20	8.4
1991年～2000年	35	14.6
2000年～2010年	82	34.3
2011年～2020年	72	30.1
2021年～2024年	25	10.5

注：2024年の数字は不確定である。回答者の1人は、2024年1月14日の調査期間終了前に、2024年に交友を再開したと回答している。

交友を再開したときの年齢。この239人の回答者がJWとの交友を再開した時の年齢を調べるため、各回答者が交友を再開した年から生まれた年を引いて計算した。再開した時の年齢は16歳から79歳で、平均年齢は36.5歳であった。中断していた第1世代の再開した時の平均年齢は47.3歳（標準偏差，SD=13.94）であったのに対し、第2世代は30.8歳（SD=4.63）であった。表2.4によると、4分の3以上が45歳以前に交友を再開しているが、約20%は人生の後半になってから再開している。

表 2.4. 交友を再開した時の年齢

再開した時の年齢	人数 (n)	合計人数 (n=239) に対する割合 (%)
25歳以下	53	22.2
26-35	80	33.5
36-45	55	23.0
46-55	25	10.5
56歳以上	26	10.9

20代から約15年間、組織から離れた生活をし、エホバの憐れみのおかげで戻ってくることができました。厳しかった親への不満を言い訳にしていました。でも今は一生懸命に育ててくれた両親には感謝しています。

—女性, 50代, 第2世代

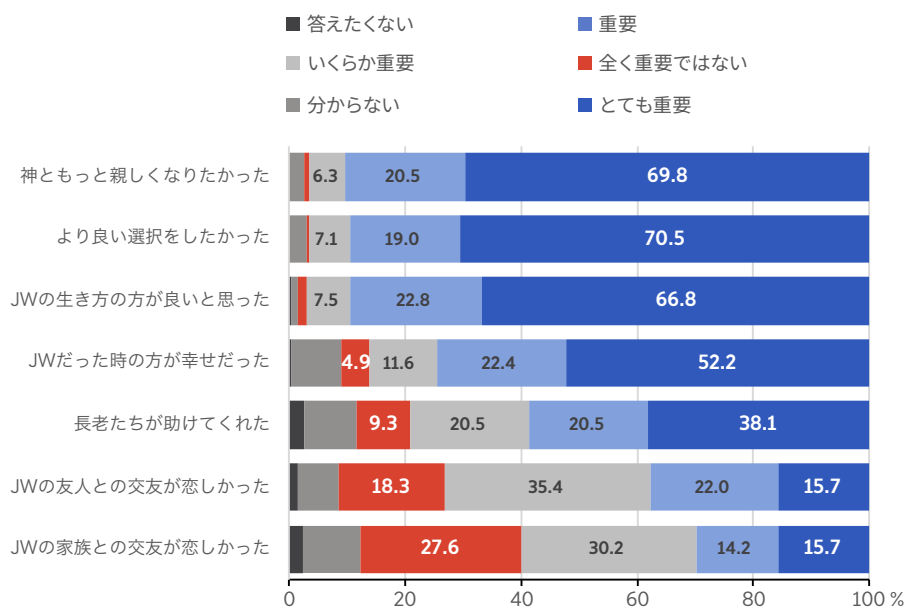
戻った理由。一時的に交友を中断したことがある回答者は、交友を再開した時に、ある特定の理由がどれ程重要だったか、あるいは重要ではなかったかを5段階で評価した。図2.12に示すように、7つの理由の中で際立っているものはなかった。約90%が、以下の理由を「重要」または「とても重要」と回答している。

- 神ともっと親しくなりたかった (90.3%)
- 人生でより良い選択をしたかった (89.6%)
- エホバの証人の生き方の方が良いと思った (89.6%)

上位3つの理由は、第1世代と第2世代のどちらも、上記と同じであったが、第2世代が最も多く選んだ項目は「人生においてより良い選択をしたかった」(91.3%)であった。回答者が「重要」または「とても重要」と評価したその他の理由は、「エホバの証人だった時の方が幸せだった」(74.6%)、「会衆の長老が助けてくれた」(58.6%)であった。状況によっては、会衆で活動しなくなった期間中、エホバの証人の友人や家族との交流が限られていた可能性がある。とはいえ、JWの「会衆の仲間との交友が恋しくなった」(37.7%)、または「家族との交友が恋しくなった」(29.9%)を再び交友を持つようになった重要な理由として選んだ回答者は比較的少数であった。これは、第1世代と第2世代のJWの両方に当てはまった。

図 2.12. エホバの証人と再び交友を持つようになった理由

エホバの証人と再び交友を持つようになった理由として、以下の点はどれほど重要でしたか。



注:n=268。

交友を再開した最も重要な理由

- ・ 神ともっと親しくなりたかった
- ・ より良い人生の選択をしたかった
- ・ JWの生き方の方が良いと思った

重要度が最も低い理由

- ・ JWの友人や家族との交友が恋しかった

エホバとの関係を強め、深める決意がこれまで以上に強くなりました。

—40代女性、離れてから戻った

会衆からの支援、人間関係の変化、差別

本調査では、日本でエホバの証人であることによるメリットとデメリットについて調査した。つまり会衆からの支援に対する回答者の認識、人間関係の変化、差別の経験についてである。

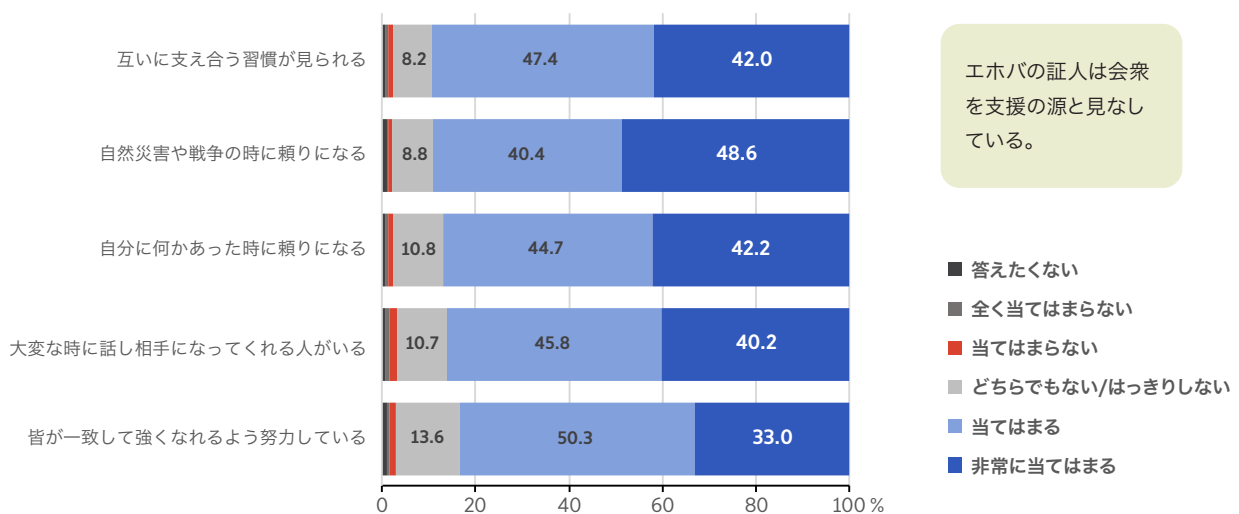
会衆からの支援。宗教団体は社会的なつながりの感覚を育て、必要な時に支援するネットワークを提供することができる。ここではエホバの証人が自分たちの宗教コミュニティをどの程度支援の源と見なしているかを調査した。地域社会の支援と回復力という尺度から選んだ5項目に対し、「当てはまる」または「当てはまらない」の5段階で評価してもらった。²³ その調査項目は、回答者が自分たちの会衆を

どのように見なしているかに関連しており、項目は以下の通りである。(1) 相互支援、(2) 会衆の一致と強さ、(3) 信頼性、(4) 大変な経験をしている時に話し相手になってくれる人がいる、(5) 自然災害、戦争、その他の非常事態の時に頼りになる。

図2.13は、各項目に対する全サンプルからの回答を示している。全ての項目で一貫して同じパターンが見られ、80%以上が各項目に「当てはまる」または「非常に当てはまる」と回答した。同意が最も多かった項目は、信者の相互支援（89.4%）と自然災害などの非常事態の時に頼りになる（89.0%）だった。²⁴

図 2.13. 会衆からの支援に対する見方

以下の項目は、あなたの会衆の人たちにどれくらい当てはまると思いますか。



エホバの証人は会衆を支援の源と見なしている。

注:n=7,193。

²³セナほか、「異文化コミュニティのレジリエンス尺度（仮訳）」（“The Transcultural Community Resilience Scale.”）

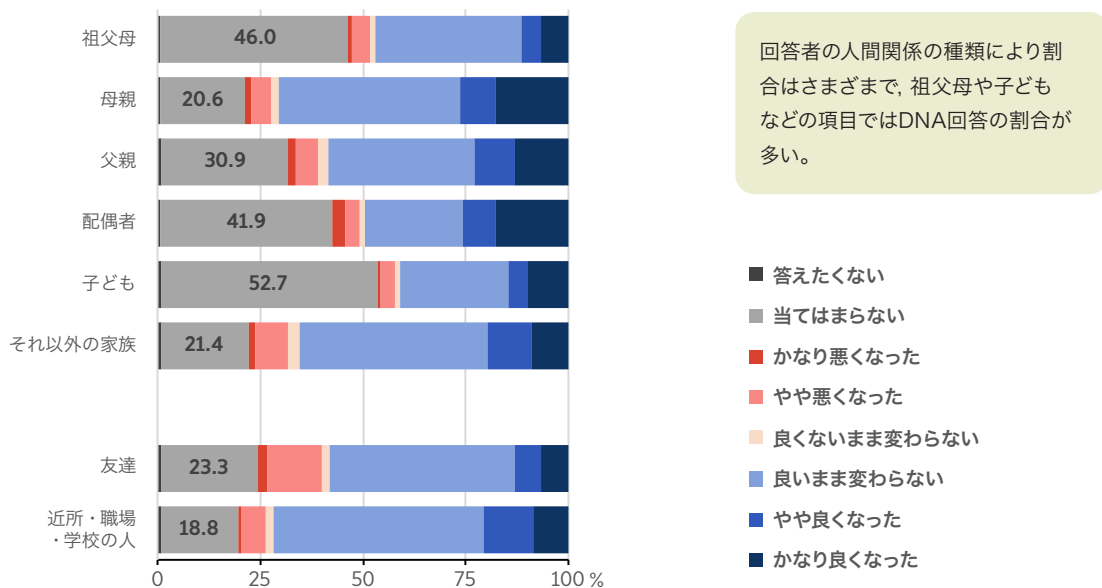
²⁴一部の回答は、調査開始直前の2024年1月1日に石川県能登半島で発生したマグニチュード7.6の地震の影響を受けた可能性がある。災害救援活動を支援するため、エホバの証人は援助を提供し、日本全国からのボランティアを組織した。（「能登半島で大地震」エホバの証人の公式ウェブサイト、2024年1月24日にアクセス、<https://www.jw.org/ja/ニュース/地域/日本/能登半島で大地震/>）。2011年東日本大震災後の災害救援活動と比較、「2011 東日本大震災 – 巨大津波の生存者は語る」目ざめよ！（2011年12月）：14-20; 2012年エホバの証人の年鑑（Brooklyn, NY: Watchtower Bible and Tract Society of New York, 2012）18-23、<https://www.jw.org/ja/ライブラリー/本/2012-エホバの証人の年鑑/過ぐる1年の際立った事柄/>

人間関係の変化。エホバの証人になる前と比較して、現在の人間関係をどう評価するか調査した。6段階評価（「かなり悪くなった」、「やや悪くなった」、「良くないまま変わらない」、「良いまま変わらない」、「やや良くなった」、かなり良くなった」）を用い、「答えたくない」（PNA）と「当てはまらない」（DNA）の選択肢も追加した。この横断的調査では、人間関係の変化を宗教の影響によるものと断定することはできないが、この尺度によってエホバの証人になった後の人間関係の変化を回答者がどのように認識しているかを知ることができる。

DNA回答は18.8%から52.7%だった。回答者は答えたくない微妙な質問についてPNAオプションを選択できたので、DNA回答は特定の関係を持たない人（配偶者や子どもがいないなど）や、死亡者（親や祖父母が亡くなっているなど）を示している可能性がある。あるいは、常にJWコミュニティの中にいたため、それぞれの人間関係の前後を比較する根拠がなく、DNAオプションを選択した人がいたかもしれない。DNA回答については不確実性があるとはいえ、このデータからエホバの証人の人間関係の種類や認識を知ることができる。図2.14は、DNA回答を含む全ての回答オプションの結果を示している。

図 2.14. JWになった後の人間関係の変化

あなたは、エホバの証人になる前と比べて、以下の項目について現在の関係をどう評価しますか。



注: 全サンプル(n=7,193)の回答に基づく。

エホバの証人になった後の人間関係の変化について理解を深めるために、分析結果からDNA回答を除外する。図2.15が示すように、ほとんどの回答者は全ての人間関係において、エホバの証人になる前も、なった後も良好であると答えている。人間関係をポジティブに捉えているということは、回答者と所属するコミュニティの両方の質の高さと安定性を反映していると考えられる。

配偶者との関係はエホバの証人になる前と比べて顕著な改善を見せている。現在結婚していると答えた3677人のうち、42.7%がエホバの証人になる前も、なった後も「良いまま変わらない」と回答した。別の46.8%は、エホバの証人になってから「やや良くなった」、または「かなり良くなった」と回答している。

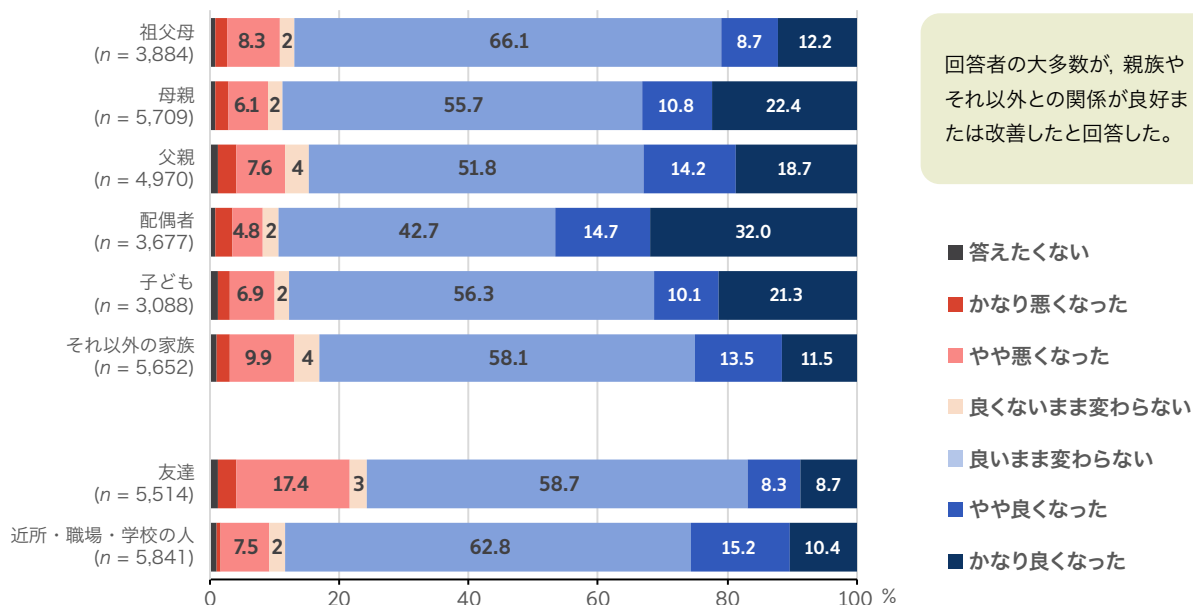
日本で世代間の緊張が高まっているこの時代に、回答者は祖父母、両親、子どもとの世代間の関係が良好であると回答した。子ども（未成年も成年も含む）がいると答えた3088人のうち、半数以上（56.3%）が子どもとの関係はエホバの証人になる前も、なった後も「良いまま変わらない」と回答し、3分の1（31.4%）が子どもとの関係が「良くなった」と回答した。また祖父母との関係もとても強く、3884人の回答者のうち、3分の2（66.1%）がエホバの証人になる前も、なった後も、祖父母との

関係が「良いまま変わらない」と回答し、5分の1（20.9%）がエホバの証人になってから「良くなった」と回答した。

全体的に回答者は、身近な人々との関係を好意的に見ており、その中にはエホバの証人ではない人も含まれる。近所、職場、学校の人との関係に対する認識について答えた5841人のうち、62.8%がエホバの証人になる前も、なった後も「良いまま変わらない」と認識しており、さらに25.6%は改宗後に関係が「良くなった」と回答している。友人との関係について答えた5514人のうち、58.7%はエホバの証人になる前も、なった後も関係が「良いまま変わらない」と回答し、17.0%は関係が「良くなった」と回答した。信条や行動の違いが友情にひずみをもたらす可能性もあるが、関係が「やや悪くなった」と回答したのは少数（17.4%）であった。

図 2.15. JWになった後の人間関係の変化

あなたは、エホバの証人になる前と比べて、以下の項目について現在の関係をどう評価しますか。



回答者の大多数が、親族やそれ以外との関係が良好または改善したと回答した。

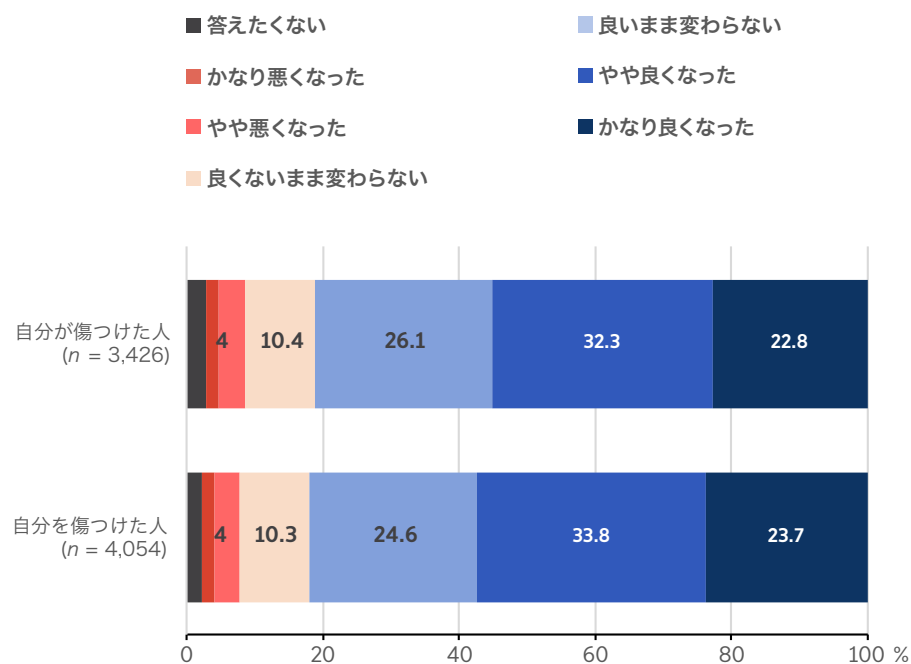
- 回答たくない
- かなり悪くなった
- やや悪くなった
- 良くないまま変わらない
- 良いまま変わらない
- やや良くなった
- かなり良くなった

回答者はエホバの証人になった後の対立関係、つまり自分が傷つけたり怒らせたりした人との関係と、自分を傷つけたり怒らせたりした人との関係についても評価した。回答者の約半数は、対立関係はないと回答した。43.6%が自分を傷つけたり怒らせたりした人と対立関係はなく、DNAを選択し、52.4%は自分が傷つけたり怒らせたりした人と対立関係はなく、DNAを選択した。

図2.16は、回答者が対立関係において、その関係の変化をどう認識しているかを示している。半数以上は自分が傷つけた人（55.1%）と、自分を傷つけた人（57.5%）との関係が「やや良くなった」、または「かなり良くなった」と回答した。

図 2.16. 対立関係に対する認識

あなたは、エホバの証人になる前と比べて、以下の項目について現在の関係をどう評価しますか。



半数以上が、自分が傷つけた人や自分を傷つけた人との関係が良くなったと回答した。

注:「当てはまらない」の回答は削除されている。

図2.5に示すように、第1世代、第2世代の大多数は、エホバの証人になる前も、なった後も近しい家族との関係は良好、または良くなったと回答した。全ての間人関係において良好、または良くなったと回答した人の割合は、エホバの証人の親に育てられた人

(第2世代)の方が第1世代より高くなっている。対立関係についても同じパターンが当てはまる。どちらの世代も大多数は、対立した人との関係が以前から良好、またはエホバの証人になってから良くなったと考えていた。

表 2.5. 関係性の認識 – エホバの証人の第1世代と第2世代

関係	JW第1世代 (n=3847)			
	良いまま変わらない	やや良くなった	かなり良くなった	合計
人間関係				
祖父母 (n=1555)	55.5%	9.8%	15.9%	81.2%
母親 (n=2801)	48.1	12.8	20.4	81.3
父親 (n=2263)	49.5	13.7	17.0	80.2
子ども (未成年も成年も含む) (n=2553)	54.4	11.0	21.4	86.8
配偶者 (n=2526)	34.5	18.0	34.0	86.5
対立関係				
自分が傷つけた人 (n=1763)	24.5	31.9	20.3	76.7
自分を傷つけた人 (n=2127)	23.9	33.0	22.0	78.9
関係	JW第2世代 (n=2797)			
	良いまま変わらない	やや良くなった	かなり良くなった	合計
人間関係				
祖父母 (n=2006)	74.7%	7.6%	8.6%	90.9%
母親 (n=2426)	65.5	8.7	22.1	96.3
父親 (n=2308)	55.6	14.5	18.6	88.7
子ども (未成年も成年も含む) (n=372)	68.3	5.9	21.2	95.4
配偶者 (n=926)	64.4	6.9	25.9	97.2
対立関係				
自分が傷つけた人 (n=1392)	28.5	33.1	25.1	86.7
自分を傷つけた人 (n=1603)	26.0	35.4	25.2	86.6

注: 関係ごとに回答者数(n)は異なる。各世代の合計は、関係が以前から良好、またはエホバの証人になってから良くなったと回答した人の割合。

会衆内に問題がないことは絶対ない、でも家族だからすれ違いなどは当たり前で、話し合ったり、許したり、許されたりして……
一致して居心地が良くなります。

—女性, 30代, 第2世代

メディアやソーシャルメディアなどでの差別の経験アンケートでは、差別に当たるさまざまな項目が列挙され、過去12カ月間にどんな差別を経験したかを回答者に尋ねた。回答者は該当する全ての項目を選択できた。図2.17は、各項目を選択した回答者の割合を示している。その中で最も多かったのは、メディア報道に関するものだった。回答者の大多数(94.8%, 6165人)が、「エホバの証人のことを誤り伝えていると感じる報道を目にした」と回答した。さらに33.9% (2206人) は、「否定的なメディア報道のために、エホバの証人以外の人に同情された」と答えた。この調査結果は、エホバの証人やそれ以外の人々が、この宗教団体に関するメディア報道を不正確と見なしていることを示している。

また本調査結果はソーシャルメディアが悪影響を及ぼす可能性も示唆している。一部の人(9.4%, 610人)は、「エホバの証人に関するソーシャルメディアの投稿を見た家族や友人から圧力を受けた」と回答した。さらに、「エホバの証人であるために、侮辱された」(8.9%, 578人)、「疑いの目で見られた」(8.5%, 555人)という回答もあった。それ以外の差別を経験した人も少数ながらおり、その中には、「仲間外れにされた」(2.1%, 134人)、「不当な扱いを受けた」(1.9%, 122人)、「雇ってもらえなかった」(1.0%, 63人)、「身体的な脅しや攻撃を受けた」(0.8%, 54人)、「暴言や暴力を受けたとされるお子さんを守るために先生が介入した」(0.4%, 24人)などがあった。

ニュースで取り上げられるのはエホバの証人に対するネガティブな報道ばかりで、エホバの証人であることを幸せに感じている2世の声は取り上げられないことを残念に思う。

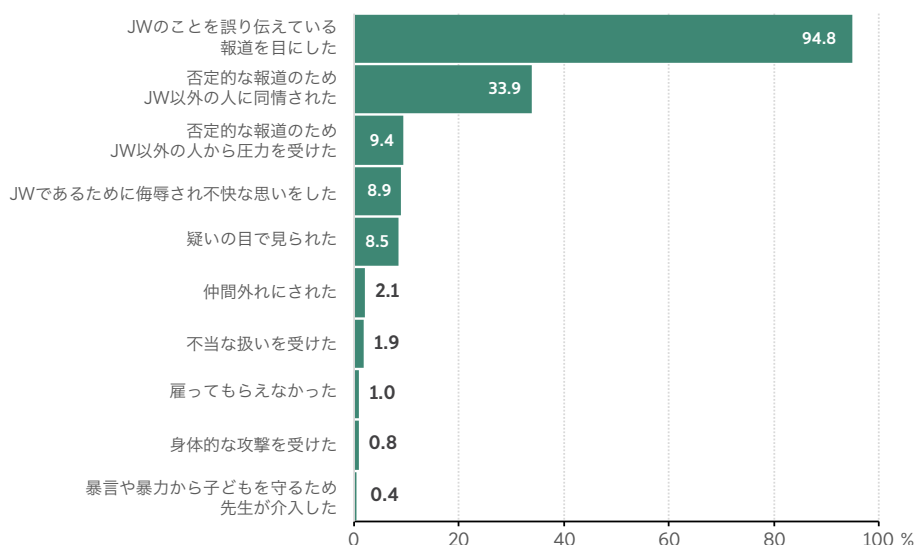
—女性, 20代, 第2世代

聖書と聖書が教えていることを大切にすることは私の個人的な決定だが、証人ではない人々からの侮辱や批判を含め、他の人からの視線に深く傷ついている。

—女性, 20代, 第2世代

図 2.17. 日本のエホバの証人が経験した差別

過去12カ月間に、あなたが経験したのがありますか。



エホバの証人(94.8%)は自分たちの宗教を誤り伝えていると感じる報道を目にしたことがある。

注: n=6,502。PNAとDNA回答の合計(n=691)は除外されている。

結論

日本におけるエホバの証人の初期にあたる1950年代から1980年代後半にかけては、JWがいない世帯からの改宗者が大多数だった。時間の経過に伴い、新しくバプテスマを受ける人の多くは第2世代のJWとなっている。今日、会衆は第1世代と第2世代で構成されており、第3世代のJWの増加も見込まれている。

エホバの証人がバプテスマを受けた年齢はさまざま、若い頃に受けた人もいれば、人生の後半になってから受けた人もおり、平均年齢は28歳である。エホバの証人としてバプテスマを受けるかどうかの決定は、かなりの時間と学びを経た後になされる。日本のエホバの証人の3分の1は、JWである親から宗教について学んだ。親以外の信者から学んだ人のうち約半数がバプテスマの前に2年以上学んだ。大多数は、この宗教に属するかどうかの決定は個人的な選択であると認識していた。

多くの日本のエホバの証人にとって、教理の論理性は、当初また現在の魅力となっており、それが入信および継続の動機となっている。

家族が個人の宗教の決定に与える影響はさまざまである。改宗者のうち、約半数にJWの親はいなかった。JWの家族を持つ人たちにとって、そのつながりは当初の魅力であったものの、継続の動機ではない。家族からの肯定も否定も宗教を続ける（あるいはやめる）理由とは見なされなかった。JWの家族や友人から拒絶されるのではないかという懸念をエホバの証人を続ける動機として選んだ人は1%未満であった。エホバの証人は魅力を感じる点として、「より良い人生の選択ができる」、「道徳的指針」、「将来への希望が持てる」を挙げている。しかし、この宗教を続ける1番の理由は、「神とずっと親しくなれる」ことだった。

バプテスマの後、圧倒的多数が中断することも、後悔することもなく、この宗教を続けている。全サンプルのうち、少数（3.7%）は交友を中断し、後に再開している。そのうちの約半数は4年以内に、ま

た4分の1は10年以上の中断後に交友を再開した。この少数のグループは、再び交友を持つようになった重要な理由として、「神とずっと親しくなりたかった」（最初にこの宗教に魅力を感じた点と同じ）と回答した。また、人生で「より良い選択をしたかった」ことや、「エホバの証人の生きの方が良いと思った」という点も交友を再開する理由として挙げている。

調査結果によると、エホバの証人は宗教が自分たちの生活に与える影響をポジティブに捉えており、会衆を社会的、また実際に支えてくれる存在と見なしている。全体的に、ほとんどのエホバの証人が、証人になってからも人間関係は良好で変わらないと答えた。家族やそれ以外の人との関係が証人になってから改善したと答えた人もいる。関係の改善は宗教だけに起因するものではないが、この調査によると、エホバの証人は自分たちの宗教が家族関係やより広い地域社会との関係に有害な影響ではなく、良い影響を与えると考えている。人間関係が良好、または証人になってから良くなったと回答した人の割合は、エホバの証人の親に育てられた人（JW第2世代）の方が、JWの親を持たない第1世代よりも高かった。

エホバの証人であることのデメリットは、差別を経験することであり、特にメディアによるJWコミュニティの否定的な描写によるものである。ほとんどのエホバの証人は、自分たちの宗教を誤り伝えていると感じる報道を目にしたことがある。否定的なメディア報道やソーシャルメディアの内容に対して、エホバの証人でない人が、信者に対して同情を示すこともあれば、圧力を強めることも報告されている。エホバの証人が経験するそれ以外の差別（例：侮辱される、疑いの目で見られる、雇ってもらえない、脅しや攻撃）もメディア報道やソーシャルメディアの影響を受けている可能性がある。調査サンプルでは、学校で暴言や暴力を受けたとされるJWの子どもを守るために先生が介入した24件の事例が含まれている。その割合は比較的小さいものの、日本全体に当てはめて考えれば、その数は懸念すべきものであり、他国で暴力に発展したようなへ

イトスピーチの増加により、少数派の宗教コミュニティが危険にさらされる可能性がある。²⁵

エホバの証人になること、続けること、あるいは戻ることを選んだ人の年齢や生活状況は多岐にわたる。しかし調査結果は、信仰する宗教に対する態度や信念に明確なパターンがあることを明らかにしている。改宗には学ぶ過程が伴うため、ほとんどの人、例えば高齢の信者は晩年まで何十年も強い信仰心を持ち続ける。回答者は社会的な魅力（家族を喜ばせる、友人を見つける）や儀式よりも、宗教の内的側面（神との親密さ、自己の向上）を好むという共通認識を持っていた。また社会的な差別に対する一般的な認識があるにもかかわらず、エホバの証人になり、続けるという決定を後悔している人はわずかだった。ほとんどの人がそのような決定をしたのは社会的影響によるものではない。とはいえ、会衆

からの社会的支援があること、また家族やそれ以外の人々との関係が改善されたことからわかるように、人間関係も重視されている。

宗教グループの存続は、大小や新旧を問わず、信条や実践の習得と、次の世代への継承にかかっている。JWJ-QSは、日本のエホバの証人が信仰を受け入れた過程と理由を明らかにした。その報告からわかるように、学びと論理性が最も顕著な魅力の1つとなっており、エホバの証人の信念体系は論理的だという客観的な評価と一致している。しかし、多くの回答者にとって家族のつながりも、信仰の継承や、宗教の学びと実践の過程に影響を与えている。調査結果は、エホバの証人の改宗、宗教コミュニティに属する動機、社会との関係についての洞察を提供している。

²⁵ジェニー・ヒル、ヤロスラフ・ルキフ、「ハンブルグ銃撃事件 - エホバの証人の会館襲撃で7人死亡（仮訳）」（"Hamburg Shooting: Seven Killed in Attack on Jehovah's Witness Hall,"） March 10, 2023, <https://www.bbc.com/news/world-europe-64910415>. シェリラン・モラン、アシュラフ・パダンナ、「ケララ州攻撃：インド警察がエホバの証人を標的とした致命的な爆発を調査」（"Kerala Attacks: India Police Investigate Deadly Blasts Targeting Jehovah's Witnesses"）, October 30, 2023, <https://www.bbc.com/news/world-asia-india-67259078>. 最近の宗教差別に関する一般的な議論について、ジョナサン・フォックス、「わたし以外のどんなものも神としてはならない - なぜ政府は少数派宗教を差別するのか（仮訳）」（*Thou Shalt Have No Other Gods Before Me: Why Governments Discriminate Against Religious Minorities*）（Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2020）, <https://doi.org/10.1017/9781108773171>. エティ・ペレツ、ジョナサン・フォックス、「ヨーロッパと西洋でカルトと認識されているグループに対する宗教的差別（仮訳）」、『政治、宗教、イデオロギー（仮訳）』（"Religious Discrimination against Groups Perceived as Cults in Europe and the West"）（*Politics, Religion & Ideology*） 22, nos.3-4（2021）: 415-435（1-21）, <https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/21567689.2021.1969921>

本調査は、2023年12月27日、独立機関審査委員会であるパール治験審査委員会（Pearl IRB）により承認された。全てのデータ収集・管理手順は、倫理基準および1964年のヘルシンキ宣言とその改訂事項を順守している。資金提供はアーノルド・リーブスター財団。（平和、寛容、人権を促進する目的で設立された。）